

小平市教育委員会議事録

——8月臨時会——

令和5年8月10日（木）

開 催 日 時 令和5年8月10日（木） 午後2時00分～午後6時48分

開 催 場 所 大会議室

出 席 委 員 青木由美子 教育長
三町章 教育長職務代理者
丸山憲子 委員
青木雅代 委員
望月克浩 委員

説明のための出席者 白倉克彦 教育部長
岡崎奈緒子 教育指導担当部長兼指導課長
安部幸一郎 地域学習担当部長
竹中敏明 教育総務課長
高橋恵一 教育施策推進担当課長
吉田将人 指導課長補佐
松田弦 指導主事
坊本朋久 指導主事

書 記 山本真由美 教育総務課長補佐、長江陽一 教育総務課主任
傍 聴 者 17名

午後2時00分 開会

（開会宣言）

○青木教育長

ただいまから教育委員会8月臨時会を開会いたします。

傍聴者の方にお伝えいたします。入口でお渡しいたしました傍聴券の裏面に注意事項が記してありますので、ご了解の上、傍聴中は静粛にさせていただき、円滑な会議の進行にご協力いただきますようお願いいたします。

（署名委員）

○青木教育長

それでは、はじめに、議事録署名委員の指名を行います。本日の議事録署名委員は、丸山委員、及び私、青木でございます。

（協議事項）

○青木教育長

それでは、協議事項を行います。

協議事項「令和6年度から令和9年度使用小学校教科用図書について」を議題といたします。

はじめに、本年度の小学校教科用図書の採択について、これまでの経緯の説明をお願いいたします。

○岡崎教育指導担当部長

令和6年度から令和9年度使用小学校教科用図書について、これまでの経緯をご報告いたします。

本年4月20日の教育委員会定例会におきまして、令和6年度使用小学校教科用図書採択方針、令和5年度小平市立小学校教科用図書採択要領及び同細則を定め、これに基づきまして、5月9日に、学識経験者、保護者代表、小学校長、副校長で構成される小平市立小学校教科用図書審議委員会及び同審議委員会の下部組織であります教科用図書調査部会を設置いたしました。

同調査部会では、発行者ごとに専門的な調査研究を行い、調査資料をまとめ、7月11日に同審議委員会に提出いたしました。また、6月14日から7月2日までの間、市内6館の図書館におきまして、教科書の見本本を展示し、併せて市民の方々を対象としたアンケートを実施し、ご意見等を寄せていただきました。

各学校におきましても、各教科書の調査研究を行い、その結果を報告書としてまとめ、同審議委員会に提出いたしました。

同審議委員会からは、これらの資料をもとに検討し、まとめたものを報告書として、7月12日に提出いただきました。

教育委員の皆様には、同審議委員会からの報告書の他、同調査部会の調査資料、各学校における調査研究結果、各教科書発行者の教科書編修趣意書、東京都教育委員会が作成した教科書調査研究資料、図書館で実施したアンケートの写しをお渡ししております。これらの資料も併せてご参照いただき、ご協議いただきたいと存じます。

なお、同審議委員会より、各教科書の調査研究は、この後ご説明させていただきます学習指導要領に示されている「各教科の目標」並びに授業づくりの重要な視点である「主体的・対話的で深い学びの実現」、また、令和3年1月の中央教育審議会答申「令和の日本型学校教育の構築を目指して」において示されている「個別最適な学びと協働的な学びの充実」などの視点を踏まえ、子どもたち一人ひとりが自分の考えをもち、質の高い対話に向かうこと、自ら課題を見つけ、主体性をもち、ICT環境を活用しながら学ぶことに資するものであるかという視点で進めたとの報告をいただいております。

○青木教育長

今年度採択する小学校教科用図書につきましては、11教科13種目でございます。

協議の手順といたしましては、本日は種目ごとに、国語、書写、社会、地図、算数、理科、生活、音楽、図画工作、家庭、保健、英語、道徳の順に委員の皆様からご意見をいただき、採択を

決定する議案に載せる教科用図書の候補を2者から3者程度に選定いたします。

8月17日の教育委員会定例会では、さらに候補を1者に絞り込み、協議終了後に議案を作成し、審議する予定でございます。

それでは、小学校教科用図書の見本本を用意されておりますので、適宜ご参照いただき、また、すでに7月定例会で報告をいただいております「小平市立小学校教科用図書審議委員会報告」についても参考にご協議願います。

進行状況にもよりますが、協議する内容が多いため、生活の協議に移る前あたりで、1回休憩をとりたいと存じます。

なお、教科ごとの協議に入る前に、学習指導要領のポイントについて、事務局より説明願います。

では、はじめに、国語について行います。

○岡崎教育指導担当部長

それでは、国語科について説明いたします。

国語科は、言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し、適切に表現する資質・能力を育成することを目指しております。

目標は、第1に、日常生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うことができるようにする。

第2に、日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う。

第3に、言葉が持つよさを認識するとともに、言語感覚を養い、国語の大切さを自覚し、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養うと示されております。

○青木教育長

それでは、国語の協議に入ります。国語につきましても、発行者3者から見本本の提出がございました。図書名を申し上げますと、東京書籍が「新編 新しい国語」、教育出版が「ひろがる言葉 小学国語」、光村図書出版が「国語」でございます。

それでは、皆様、ご意見を伺いたいと思います。どなたかご発言をお願いいたします。

○丸山委員

私から意見を述べさせていただきたいと思います。

国語のこの3者において、どの教科書も表紙のイラストや中の挿絵、また背景画もとてもきれいな色合いで、優しさがある落ち着いた雰囲気になっており、どれも子どもたちが教科書を持って楽しくなるようなものになっていると思います。どの会社も、いろいろな図書の紹介もされているので、読書への興味を促すという点においてもこの3者は優れていると思います。

この中で優劣というか、いいところを見つけますと、光村図書出版は、質の高い文章、素材を使って、そこから子どもたちにどうやって学ぶか、そして学んだ後の理解までのきめ細かい指導

が教科書でされていると思います。もちろん他の会社もそうですが、光村図書出版は写真資料も豊富ですし、インターネットのQRコンテンツも豊富で、いろいろな資料をここで見る事ができるといういい点があります。

東京書籍は、1年生の上で、言葉の擬音や長音、促音を手でたたいてリズムで学習します。他の教科書にはないところで、1年生がはじめて言葉に向き合うときに分かりやすくなるだろうと思います。

3者はどれも実際の点字が入っていて、それぞれ学年が違いますが、文字だけではなくいろいろな言葉に関係する表現を学習する機会をここで提示していると思います。

教育出版は、特に言葉について、万葉仮名や片仮名、平仮名の成り立ちがきちんと提示されており、平仮名がどのように万葉仮名から発展しているのかが分かるという点では、国語のまず重要なところですのでいいと思いました。特にこの中でぜひ子どもたちに読ませたいと思ったのが、津田梅子さんの伝記の部分です。6年の下巻にあります。皆さんご存じのように、津田梅子さんが創設した津田塾大学は小平市にありますし、来年、紙幣にもなるということで、郷土の人を教科書で知るということは本当にいいことだと思います。さらに、これを津田塾大学の高橋裕子学長が書いているという意味でも、地元根づいた郷土的なことも学べます。なかなか教科書で自分の住む小平市にある学校について知る機会がないところ、全国の子どもたちが使っている教科書に津田塾大学のことが書いてあることでうれしくなりますし、愛着も湧くと思います。3者どれも甲乙つけ難いですが、やはり津田梅子さんの伝記が入っている教育出版の「ひろがる言葉 小学国語」を挙げたいと思います。

○青木委員

国語というのは、言葉による見方や考え方がもともになる教科だと考えます。3者とも言葉を大変大切に扱っているのが感じられ、すてきな言葉をたくさん載せている付録や巻末資料もありました。

その中で、どの学年も最初に「さあ、言葉について学んでいこう」と始まる光村図書出版の教科書を推薦したいと思います。ふだん使う言葉は学校生活の中でもとても大切なものだと思うのですが、光村図書出版の巻末の言葉の宝箱は、1年生から6年生まで成長段階に合わせたすてきな言葉が掲載されています。

小平市は、全国学力・学習状況調査の結果で、国語は平均よりは上ですが、少し二極化している状況ということですので、国語を苦手だと思う人をなくしていけるとよいと思いました。光村図書出版は單元ごとに何をするのかという観点が示され、授業の流れがはっきり示されているという点で子どもにも分かりやすいと思います。

また、苦手になりがちな各単元の活動のところでは、書くことに対する説明がかなり細かくなされていて、書くという活動に取り組みやすいと思います。読み取るというところでは、モデル文章として見開きで構成が分かる程度の短い文章を先に配置し、その後に説明文の長い教材を入れるという工夫がなされているのがよいと思いました。

国語という教科をはじめて学ぶ1年生の教材の本文は、文字の大きさや配置からとても読みやすく、はじめて授業を受ける児童にはとても大切なことだと思いました。

今挙げたような点や、長く教科書に採用されている質の高い読む教材が掲載されているという点から、私は光村図書出版の「国語」を推薦したいと思います。

○望月委員

私は小学校2年生の子どもがいますので、保護者として見たときにどうかと考えながら見させていただきました。特に一番気になっていたのが、最近は書くという機会が大分減ってきていると思っております。書き順などを学ぶことが、小さい子どもだと多いのかと思いつつ見せていただいております。

東京書籍と教育出版の裏面のところに、この教科書で習った漢字という付録がありますが、その中で書き順が示されているところがすごくいいと感じました。

あわせて、東京書籍の中でノートの使い方があり、はじめて国語を勉強する子がどうしたらいいのかという手ほどきを書いてあるところもすごく魅力を感じました。

教育出版と東京書籍で絞り切れていないところがありますが、強いて言えば教育出版に、津田梅子さんの伝記があったというのが、親の立場として、また、小平市に住む者として見たときに、この近くにあるという話ができるというのがいいと感じた次第です。

文章の教育的な流れといった話でいうと光村図書出版が見やすく、私はすごくいいと思うのですが、子どもの視点でということ考えると、教育出版が望ましいと思います。

○三町教育長職務代理人

3人の話を聞いていて、なるほどと思ったところが多々あります。私は、それぞれの教科書のよさが異なることから、自分が大切と考えているいくつかの観点で点数をつけ、その合計点で絞り込ませてもらっています。その中で、私は最終的には光村図書出版を子どもたちに使わせたいと思いました。

1点目で私が見た観点としては、その学年でどんなことを学ぶかを見通せるような形かどうかです。光村図書出版の最初の辺りのページを見ると、前学年でどんなことを学習したかをつながけながら、今回学ぶところとの関連性が非常に分かりやすいつくりになっており、大きなポイントになりました。

2点目は、各単元での学び方、学ばせ方というところで、題材の最初のところの扉のページの扱いを見て、光村図書出版、東京書籍がそれぞれ一番目を通しやすいいと感じたところです。

3点目は、どのように学習をしていくのかというところで、学習の手引きというような言い方をしているのでしょうか。これについては、光村図書出版や教育出版が、見通しをもとう、捉えよう、深めよう、まとめよう、振り返ろうという言葉で学習の流れをしっかりと理解できるようになっている。中身としては、いわゆる国語の3観点を意識した評価のポイントになっているところを評価して光村図書出版かと思いました。

その他、やはり丸山委員もおっしゃっていましたが、題材として光村図書出版の教材はいいものが多いという印象があります。津田梅子さんは捨て難く、どちらかとさんざん悩んだところもありますが、トータルとして光村図書出版のほうが良いと思いました。

細かいところでは、3年生でやるローマ字入力の説明は東京書籍や光村図書出版のほうが良い。教育出版は、タブレットではなくキーボードの写真で、現実と違う。子どもたちはキーボードがタブレット型なのですが、普通のタワー型のキーボードの写真だったので、そういう配慮をどう考えたのかとも感じたところです。

そういうポイントづけにより、私は光村図書出版1者を推したいと思いました。

○青木教育長

ほとんど皆さんと同じような意見になるかと思いますが、光村図書出版について、今お話がありましたように、単元ごとに問いをもとう、目標を振り返ろうなどの観点が示されていて、身に付けるべき力が明確になっていると思いました。

2点目は、読書単元というのがいずれの学年にもあって、読書に親しむ習慣や態度を身に付けることができ、そこが特色であると感じました。どの会社も良質な読み物が取り入れられていますが、特に光村図書出版の6年生、「やまなし」や「鳥獣戯画」、「海の命」など、良質な読み物が多く、子どもたちに学ばせたいと思ったところです。

また、他の委員もおっしゃっていましたが、説明や写真などが豊富で学習の支えとなっています。特に6年の「海の命」で魚の説明や写真などが入っていたところも印象に残りました。私としては光村図書出版を第一に勧めたいと考えました。

意見等をお伺いしましたが、今のところ光村図書出版を特に推薦するという方が3名、そして教育出版を特に推薦するという方が2名いらっしゃいます。その他にご意見等はございますでしょうか。

○丸山委員

私もかなり迷って、教育出版の津田梅子さんがすごく魅力的に思えたので、今回は教育出版を挙げさせていただいたのですが、先ほど言ったように、光村図書出版の良質な作品も、読書の紹介も、コンテンツがすごく豊富にあり、なかなか教科書を読んでも作者の生の声は聞けませんが、作者のインタビューなどを映像で見ることができるという意味でも、光村図書出版でもいいのではないかと思います。津田梅子さんは、違うところでぜひ積極的に学習に取り入れてほしいと思います。

○青木教育長

多数決ではありませんので、教育委員の皆様のご意見を尊重しながら来週につなげていきたいと思っています。一番ではないにしろ、津田梅子さんのことを取り上げているということで推薦してくださった委員が3名おり、私も教育出版の中に津田梅子さんの教材があるということで推薦し

たいと思っているところでした。

東京書籍も、体験の学びを見通せる、リズムで学習できる、また、ノートの使い方などについても評価されているということが皆さんのご意見から分かりました。

皆様のご意見を総合いたしますと、学びを見通せることや、質の高い文章であること、写真やコンテンツなどが豊富であること、加えて構成の工夫がされている光村図書出版の「国語」と、教育出版の「ひろがる言葉 小学国語」を候補として次週17日に提案ということによろしいですか。

○三町教育長職務代理者

先ほど、丸山委員からも光村図書出版のお話があったので、望月委員は光村図書出版をどう評価されているのか伺いたいです。来週に持ち越すのならまた2つを検討することになりますが、ここである程度方向がまとまるのであれば1者にしても構わないのではないかと考えています。

○青木教育長

では、望月委員、よろしくをお願いします。

○望月委員

光村図書出版の教科書の流れがすごく好きで、とても見やすいです。子どもたちにとって、今日このページで何をするのかというのがすごく分かりやすく書いてあります。そういう意味では、先生方の指導のしやすさなどにすごく考慮されてのつくりであると感じております。

先ほど、少し省略してしまいましたが、中に入っている書籍のことでもいろいろと研究をなされた上でつくられた部分だと思います。どれか1つということで、教育出版にさせていただきましたが、光村図書出版ももちろんすごくいいと思いますので、総合的に見ていただいてご判断いただければと思います。

○青木教育長

望月委員のご発言も含めて皆様のご意見を総合いたしますと、3者挙げられている中の国語の議案候補としましては、光村図書出版の「国語」を候補にすることが妥当かと存じますが、いかがでしょうか。

－「異議なし」の声あり－

○青木教育長

では、次に、書写に移ります。それでは、書写の協議に入ります。

書写につきましては、発行者3者から見本本の提出がございました。図書名を申し上げますと、東京書籍が「新編 新しい書写」、教育出版が「小学 書写」、光村図書出版が「書写」でござ

います。

それでは、皆様、ご意見を伺いたいと思います。どなたかご発言をお願いいたします。

○丸山委員

書写について教科書が3者ありますが、どれも、最初に筆や鉛筆の持ち方、きちんとした姿勢、字を書く心構えから始まって、毛筆に関しては3者とも朱墨を使用してお手本が書かれています。どこに力を入れて書いているか、どういうふうに筆を入れるかが書いてあり、とても分かりやすい教科書になっております。さらに、3者とも二次元コードで実際に書いている映像を見ることができるので、筆の持ち方や筆遣いも分かるのでいいと思います。

この中で、私は特に東京書籍がいいと思います。どこの教科書会社もここがいいというところがありますが、東京書籍の場合は、まず書道の本質において基本である墨の存在がきちんと書かれています。もちろん3者とも墨については書いてあるのですが、東京書籍では、すり方についても最初のほうできちんと道具の説明とともに書いてあります。昨今は墨汁が普通になっていますが、本来はやはり墨で書くので、墨の濃淡を書道で学んでほしいという意味でも、東京書籍では墨のすり方をきちんと取り扱っているのでいいと思います。

さらに、東京書籍は目次も分かりやすく、各ページの右上のほうに大きな字で見出しが書いてあります。その他のところでは、そういうきちんとした見出しが分からなかったり、小さかったり、横書きで書いてあったりします。また、「書写のかぎ」という各学年でポイントを提示しているので、それも分かりやすいと思います。

特に東京書籍がいいと思ったのは、変体仮名の字がきちんと教科書に載っています。光村図書出版も字母に関して説明はしてありますが、二次元コードのコンテンツでその字母を見ることができるだけであり、教育出版に関してはそういうものはありません。そもそもなぜ平仮名がそういう形なのか、片仮名がそういう形なのかというのも、まずその変体仮名、漢字があって、それが徐々に平仮名になったという流れがあります。あいうえおだけではなく、そういうものをきちんと全部見せているのは東京書籍だけでした。

どこの教科書会社も、平仮名を書いていったときの筆の流れといったものをきちんと意識しているのですが、それも変体仮名の字母を意識してのものだと思います。今すぐこれを勉強するわけではありませんが、草書や行書も中学校になると習いますので、そういう意味では、筆で字を書く、実際に縦書きで字を書く上では変体仮名の字母の取扱いは重要だと思い、東京書籍がいいと思いました。

技能なので、誰が教えても同じように教えられるというのがこの教科のいいところで、もちろん3者ともきちんとなされていると思いますが、東京書籍はきちんと字の特徴を意識しているということから、東京書籍を私は挙げました。

○三町教育長職務代理者

なるほど、そういう見方があるかと勉強させていただきました。

私は逆に、書写というものは学校で学ぶだけでは身に付かないだろうし、自分で学んでいくのに何がいいかという視点で見ました。そのため、正しい姿勢や筆の持ち方で書けることというのが1つ大きなポイントです。また、私も大人になってから知ったのですが、漢字や仮名の大きさや配列に注意して書く、つまり中心に書くということや、文字の大きさをどのように発達の段階で指導しているのか。筆の払いをどうしたらいいかといったことを学校だけではなく、家で少し勉強してみようというときにも使えるものという視点で見て、光村図書出版が1番いいと私は感じるところです。

姿勢や筆記具の持ち方については、どこもしっかりしていますが、私は左利きですが、最近は左利きにもかなり配慮しています。光村図書出版は動画でもかなり意識しているところなどで配慮しています。また、3年生の毛筆スタートブックというのが光村図書出版についていて、モデルの写真がとてもよいと思いました。姿勢もいいです。

3年生、4年生で扱う漢字や仮名の大きさや配列に注意して書くことについて、3年生をメインにして指導する教科書と、3年生、4年生で分けて扱うところがありますが、光村図書出版が良いと思ったのは、3年生では基本的に行の中心に書くことに焦点が当てられていて、4年生でノートの達人になろうということで、文字の大きさ、漢字や平仮名の大小の違いや行の中心、あるいは字間、それから横書きにも配慮されたものがあったということで勉強になるなと思います。

それから、筆の扱いについての動画でいいと思ったのは、光村図書出版は筆の払いを2方向から映して学ぶ形になっているという点でも、一番学ぶのに良いと思いました。そういうところを総合して、私は光村図書出版と判断しました。

○青木委員

今、学校でもタブレット端末などを使用する機会が多くなって、字を書く機会が本当に減っていると思います。この書写の授業で字を書かせる作業というか、活動をしっかりしていけたらいいと思います。

その際に、三町委員も先ほどおっしゃっていたように、私も光村図書出版の書写がQRコンテンツも含め詳しくいろいろ説明されていて、いいと思いました。特に字を書く前にリラックスする書写体操という独自のものがあって、楽しく子どもたちも取り組めるのではないかと思います。

また、姿勢、鉛筆や筆の持ち方、書道の道具のそろえ方など、これを全て左利きの人に対しても右利きの人に対しても詳しく載せているという点では、子どもたちの中にも最近は左利きの子も多いと思いますので、そこに対応したものであり、よいと思いました。

書写というどうしても毛筆に目が行ってしまいがちですが、3者とも、ノートの書き方や生活に即したポスターやリーフレット、はがきの書き方などの扱いが各学年であり、相手に伝わる表現の仕方をしっかり学べる教科書だと思いました。その中でも、光村図書出版のコンテンツの中で、習字を書くことについて、一方向からではなく角度を変えて筆の運びが見られるというのは、子どもがここからどうやって筆を入れていったらいいのだろうと思うところがしっかり見ら

れますので、そういうことが確かめられてよいと思いました。

そうした点から、私も光村図書出版の「書写」を推薦いたします。

○望月委員

先ほど東京書籍に書いてある墨のことについても、全く知識がなくて少し恥ずかしかったのですが、ご教示いただいております。やはり違う見方ができるのだなと思いました。

迷ってしまったのですが、1つ挙げさせていただくとしたら光村図書出版がいいと思いました。書き方といったところを考えたときに、多方面から見られるというのがすごくいいと思います。特に、右手、左手、それぞれ利き手に関しても必ずと言っていいほど掲載されています。非常に細かく指導いただけるような流れとして、それぞれ用意をいただいているところがすごくいいと感じた次第です。

最近、鉛筆のこともなかなか指導をしてもらったことがなかったのですが、この辺のことも結構細かく書いてあるというところがいいと思いました。

○青木教育長

私は、3者ともあまり大きく差はなく、墨のすり方や細かいところまで読み取れず、差がつけられなかったのですが、私は東京書籍を勧めたいと思いました。

3点ほど理由がありまして、1つは、どこの会社も、左右の持ち方に対応はしていますが、写真で大きく左で持つときはこうというような、特に1年生、2年生、低学年のところでは、鉛筆の持ち方が左右に対応していると感じたこと、それから、学習する教材の説明がとても丁寧で、イラストが分かりやすいと思いました。

また、どちらも二次元コードは豊富ですが、各ページで有効に活用できると、筆の動かし方の説明も分かりやすいと感じ、東京書籍を推薦したいと思いました。

光村図書出版も、二次元コードのコンテンツが豊富だったり、筆の動きや運び方のイラスト、いろいろな小さいイラストもあったり、跳ねたりというようなことで子どもたちにも分かりやすいというのは共通していたと思います。

私としては東京書籍を勧めたいと思ったところですが、姿勢や筆の持ち方、左利きのこと、字を書いていく順序、中心や大きさなどの確認に対応しているということ、QRコンテンツで角度を変えて書き方が見られるというようなことを考慮して、光村図書出版の教科書が3名でした。

それから、東京書籍が2名で、先ほど私が申し上げた点、墨の存在、書写では欠かせない道具の紹介、目次も分かりやすい、変体仮名の学習が明確に書かれていたというようなご意見でした。追加のご意見がございますか。その2者から来週絞り込むということでいかがでしょうか。

－「異議なし」の声あり－

○青木教育長

では、そのように進めていきたいと思います。

次に、社会に移ります。社会について、事務局から説明を願います。

○岡崎教育指導担当部長

それでは、社会科について説明いたします。

社会科では、社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追及したり解決したりする活動を通して、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を育成することを目指しております。

目標は、第1に、地域や我が国の国土の地理的環境、現代社会の仕組みや働き、地域や我が国の歴史や伝統と文化を通して社会生活について理解するとともに、様々な資料や調査活動を通して情報を適切に調べまとめる技能を身に付けるようにする。

第2に、社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考えたり、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断したりする力、考えたことや選択・判断したことを適切に表現する力を養う。

第3に、社会的事象について、よりよい社会を考え主体的に問題解決しようとする態度を養うとともに、多角的な思考や理解を通して、地域社会に対する誇りと愛情、地域社会の一員としての自覚、我が国の国土と歴史に対する愛情、我が国の将来を担う国民としての自覚、世界の国々の人々と共に生きていくことの大切さについて自覚などを養うと示されております。

○青木教育長

それでは、社会の協議に入ります。社会につきましては、発行者3者から見本本の提出がございました。図書名を申し上げますと、東京書籍が「新編 新しい社会」、教育出版が「小学社会」、日本文教出版が「小学社会」でございます。

それでは、皆様、ご意見を伺いたいと思います。どなたかご発言をお願いいたします。

○望月委員

私が小学校にいた時と全然違って、非常に分かりやすくつくられていると感じました。3者とも、学び方などに関して、教科書の一番最初から記載をしていただいている、二次元コードもかなり豊富に用意されていると感じました。

教育出版ですが、津田梅子さんをまた同じように取り上げていただいていたりと、戦争の遺跡として東大和市を取り上げていただいていると、我々小平市としては身近なものであると感じますので、すごくよいのではないかと感じました。

それぞれ特徴があつていいと思ったところを羅列して申し上げますと、東京書籍は、小学校の高学年になればなるほど学ぶべきところが増えてきて、かなり分厚くなってきてしまっていますが、東京書籍は2つに分かれる形になるので、最近を持ち帰りというのも多くはないのかもしれない

んが、子どもたちにとってはすごく扱いやすくてよさそうだと感じました。最後まで使っていますとどうしてもぼろぼろになってしまいますので、分けていただいたというのはものすごく特徴的だと感じました。東京書籍も同じように津田梅子さんを取り上げていただいています。

教育出版は、開くとすぐにSDGsが出てきます。どの授業で取り上げるべきものなのかというのはそれぞれあるとは思いますが、私は、社会で取り上げていただくというのは大事なことだと思いますので、社会の一番最初のところに出てきた教育出版はすごくいいと思いました。

私がすごくいいと思ったのが、教育出版です。学校の先生にとっても児童にとっても流れがすごく分かりやすくていいと思いました。「つかむ」や「調べる」、「まとめる」といったものが教科書にもかなり細かく記載があります。調べていく児童も、今どういう單元なのかということがすごく分かりやすくてよいと思いました。このような仕掛けは、教育出版と東京書籍で同じような形になっている部分があると思いますが、特にそれが如実に見えたものが教育出版でしたので、私は教育出版がいいと思った次第です。

○青木委員

社会科は3年生から始まるということで、どの教科書も2年生までの生活科からのつながりが示されていて、社会科の授業にスムーズに取り組めるような配慮がされていると思いました。

問題解決的な学習の進め方について、どの教科書も単元の進め方がよく分かるような工夫がされているというのも見て分かりました。特に構成が分かりやすいと思ったのは教育出版のもので、見開きの中で、この時間の問い、そして活動、次につなげようとなっており、その流れが大変分かりやすく配置されていると思いました。色の使い方なども、開いたときに本当によく分かるものだと感じました。

私は教育出版の「小学社会」を推薦したいと思いますが、他によいと思ったところは、まず3年生では1番近い自分の住んでいる小平市、4年生では東京都と、副読本を利用して自分の住む近い場所を学習していきます。5年生になると全国に範囲が広がり、子どもたちもなるべく身近に感じられるような教材があるといいと思ったのですが、教育出版は5年生の最初のところで野辺山原を扱われていました。これは5年生の移動教室の行き先であり、使われている写真もちょうど子どもたちが訪れる場所であったり、実際に見た風景であったりして、そこでの活動をそのまま教科書の中で教材として扱えるというのは、身近に感じられ、関心を高められると思いました。

また、先ほどの望月委員の発言にもありましたが、6年生では小平市にゆかりのある津田梅子さんが扱われています。津田梅子さんについては、どの教科書でも扱われていますが、特に教育出版で使われている写真から読み取れる部分が一番大きいのではないかと思います。説明に関してはそれほど深くありませんが、小学校に入るくらいの歳でアメリカに留学したというのがよく分かるような写真でしたので、扱うのにとってもいいと思いました。

また、戦争遺跡ということで府中市や東大和市など、近くの遺跡が取り上げられているのも子どもたちの関心を高めるものだと思います。

さらに、QRコンテンツの中で端末の積極的な活用を図っていますが、小平市で全員が持っているタブレットで例を示しており、それを見ながら子どもたちも進められるので利用しやすいと思いました。

この「まなびリンク」というQRコンテンツですが、大変分かりやすく配列され、ワークシートやクイズなどが充実しており、授業でなくてもいろいろと活用できると思いました。

そのような理由から、私は教育出版の「小学社会」を推薦したいと思います。

○丸山委員

私も、教育出版には結構小平市にゆかりがある事象が載っているのいいと思います。野辺山も、子どもたちが行って、夏に東京だったら暑いところ、向こうで涼しい朝を迎えるわけです。どうして涼しいのかなど、事前に教科書で高原の気候を学び、分かるというのはいいことですし、津田梅子さんについてもそうです。様々学ぶために、体験だけではなく教科書でその裏づけをするというのはやはり重要なことだと思います。

もちろん東京書籍でも津田梅子さんを取り上げていますし、小平市ではありませんが鎌倉街道も取り上げているので、東京書籍もいいと思いました。

教育出版は、歴史の年表がページの右端のところについていたり、その日のその時間に何を意識してやるか、最後のまとめ、次にどうつなげるかということが簡潔に見開きで提示されていたりしますので、先生方も使いやすいのではないかと思います。

さらに、3年生の社会においては「郷土資料館を訪ねて」というページがあります。まさにこういう古い民家で昔のかまどや脱穀を体験しますが、見ていると小平市のふるさと村のような感じですので、そういうところも多少リンクすると思い、私は教育出版を挙げました。

○三町教育長職務代理者

3人の方とほぼ同じです。結論から言いますと、私も教育出版を推薦したいと思いました。

やはり、視点としては問題解決的な学習を意識した教科書の構成になっているかというところが大きなポイントだと思います。教育出版と東京書籍が同じような傾向で、日本文教出版は少し違う傾向の構成になっていました。どちらがいいかと判断したとき、教育出版、東京書籍の構成のほうがいい。社会科の授業で、子ども同士で話し合っているうちに課題ができてくるというつくりは少し無理がある。基本的な事実があつてそこから問題を見いだしていくというつくりが教育出版、東京書籍でしたので、教科書としてこちらのほうがいいのではないかと思います。しかし、まとめるというところでは、新聞を書いたり意見カードを作ったりと様々な工夫が多くあるので、教育出版のほうがいいと感じました。まず、それが1点目です。

次に、私が社会科でこだわっているのは小平市との関係です。これについては、津田梅さんはそれぞれでしっかり扱われており、東大和市の変電所は教育出版が扱っている。また、日本文教出版はふれあい下水道館を5年生で扱っていますが、小平市の場合、3年生か4年生で行く小平市の地域学習ですので、載ってはいますが、少し時期がずれている。次に、玉川上水は5年生

で扱っていいのか。本文の中にふじみ野市の桜がきれいだと書いてありますが、その地図にはふじみ野市の位置が書かれておらず、せっかく本文に書かれているのに、これでは知らない地域の人が読んでもあまり意味がない説明で、少し残念だと思います。

そうすると、津田梅子さんの伝記や、府中市の甲州街道沿いにある掩体壕というのを私は中学校1年のときに見に行ったことがあります。戦時中に戦闘機を隠すためのコンクリート製のドームが、今も残っており、府中市も近くということで大事な遺産なのかと感じたところです。

小平市は今年から移動教室を始めたので、それとの関連はかなり学習として使える内容になっていて、これも大事なことだと思います。

次に、民族の問題で、明治期に日本が領土を確定していきます。中学校の教科書ではもっと詳しく書きますが、小学校でどう書かれているか読んでみたところ、教育出版だけがアイヌ民族の伝統的な文化や習慣が禁止されたと書かれている。アイヌ民族という言葉を使っている。その前文では、アイヌの人たちは云々とあって、トータルとして評価するときにはアイヌ民族という言葉をはっきり使っているので、これは非常にいいと思います。逆に沖縄の記述が簡素過ぎると少し残念に思いましたが、アイヌ民族を意識して書かれているということは評価したいです。

もう1つ、社会科の教科書で私がこだわっているのは、終戦の日、8月15日以降の記述の仕方です。私が学んだものも8月15日で全部終わった、次はもう新しい時代が変わっていくのだという構成になっている。それはどうも間違っているのではないかと私は思っており、やはりその後いろいろな問題があったわけです。それはコラムでもいいので、何かの形で入れてほしいと思っておりますが、教育出版は、本文とコラムで満州、あるいはシベリアの問題がきちんと書かれている。しかも、本文とコラムのバランスがととてもいいと思いました。日本文教出版もその部分は本文でかなり詳しく書いてありました。しかし、本文でたくさん書く必要があるのかと思います、やはり教育出版ではないかと思いました。

もう1点は、近現代の写真がカラーなのです。大体、戦時中の写真といえばモノクロの暗いイメージだったのが、全部カラーで非常に分かりやすく、リアルな感じで伝わってくる場所も評価したところです。

そうしたことから、私は教育出版と考えております。

○青木教育長

私も教育出版を推薦したいと思い、その理由を申し上げます。

4点ほどあり、1点は、本市第5学年で移動教室の目的地である野辺山を扱っているということです。移動教室で実際に現地を訪れてその地域に住む方々と交流できるということから、学習に対しての興味関心がより高められて学びつながるだろうと思いました。先ほど丸山委員がおっしゃってくださったような、体験の裏づけです。

2点目は、同じように本市にゆかりのある津田梅子氏を取り上げているということ。

3点目は、近現代の写真がカラー化されている。状況が分かりやすく、それが深い学びにつながるだろうと考えました。

そして、4点目は、つかむ、調べる、まとめる、そういった流れが單元ごとに教科書端に示してあり、非常にそれが見やすく分かりやすい、学びの支えになるだろうと考えました。

日本文教出版もふれあい下水道館が4年生で取り上げられていて、もしかしたら水の学習が小学校4年生だったのではないかと思うのですが、小平市のふれあい下水道館が取り上げられていることと、玉川上水や野火止用水といった身近な教材が取り上げられているということ。

SDGsについて、教育出版のことを話された方もいらっしゃいますが、日本文教出版は目標シールというのがあり、それが自分事として考えることにつながると考えた次第です。

私の意見を述べさせていただきましたが、構成がよい、小平市との関係、SDGsの扱い、学びの流れなどの意見をいただきましたので、皆様のご意見を総合いたしますと5名とも教育出版を推薦されるということで、こちらを議案候補としたいと思いますが、よろしいでしょうか。

－「異議なし」の声あり－

○青木教育長

では、次に移りたいと思います。それでは、地図の協議に入ります。

地図につきましては、発行者2者から見本本の提出がございました。図書名を申し上げますと、東京書籍が「新編 新しい地図帳」、帝国書院が「楽しく学ぶ 小学生の地図帳」でございます。

それでは、皆様、ご意見を伺いたいと思います。どなたかご発言をお願いいたします。

○三町教育長職務代理者

地図ですので、当然地図としての使用もありますが、実際の社会科では、そこから読み取る資料集的な使い方、扱いになるかと思えます。どちらもいいとしか言いようがないです。

実際に地図が資料集として使われるのは高学年になってからがメインかと思えます。3年生で配られますが、3年生で学ぶ材料になるのか。3年生での視点で見たときに、帝国書院は、地図の使い方に、10ページ近くと結構ページ数も多く使って、非常に分かりやすく丁寧に扱っているところを評価しました。

私は感覚的には帝国書院のほうが見やすいと思えました。

次に、小平市の位置です。小平市がどれぐらい出ているかを見ましたが、帝国書院のほうが関東地方の南部のところと1ページ、東京都とその周りのところで見開き3ページで、小平市が地図上に載っているのは2か所。それに対して、東京書籍は東京都とその周りというところの1か所しか見つからない。子どもが見て小平市はどこかといったときに、1か所と2か所で差を見るなら帝国書院になると思えました。

やはりこだわっているのは、地図であっても、日本の領土をどのように扱っているかは大事なことだと思っています。帝国書院は日本の領土とその周りとして示し、その上で日本固有の領土として北方領土、竹島、尖閣諸島を明確に1つのところで掲載している。それに対して、東京書籍は日本とその周りということで東西南北端は全体の中では示していますが、いわゆる領土とし

て、今いろいろ言われているようなところについては、それぞれの地方の地図の部分で載っているという扱いです。やはりこれは小学校5・6年生であってもある程度耳にすることですから、発展の扱いで構わないので、日本の領土ということでもしっかり示されているほうが良いと思い、帝国書院を推させていただきます。

○望月委員

まず結論から申し上げますと私は帝国書院が良いと思えました。双方とも、資料としてもすごく面白く見ることができ、良いと思えました。その中で、まず1つ、帝国書院のこの素材、一番最初に載っている裏の絵ですが、この部分がかかなり頑丈につくられています。3年生から4年間使ってもなかなかへたれないように工夫をなさっていて、6年生になったときにもものすごくぼろぼろの状態になって持ってくるということがなくて済むと思います。

もう1つは、地図に関しての約束事や使い方などがかなり細かく書かれています。子どもたちが地図の見方までかなりしっかり学ぶことができるのではないかと思います。先ほどもお話が出ましたが、SDGsに関してはこちらのほうでも記載があります。

また、さきほどの野辺山原です。地形についてこちらにも記載がありますので、この辺の地図のことも併せて、実際に自分が体験することができるというイメージで、たまたまかもしれませんがすごく見合った形であると思います、どちらかという今回は帝国書院が望ましいと思えました。

○青木委員

2者とも地図帳という中に多くの情報を取り入れられていて、3年生から6年生の様々な場面での活用ができるものとなっているので甲乙つけ難いところです。いろいろ細かいところを見て、どちらも3年生ではじめて地図帳を手にするということで、3年生にも興味をもてるような工夫もされていますが、特に帝国書院の地図マスターなどは、地図帳の利用を促して、取り組む中で楽しさを見つけられるものだと感じました。

QRコンテンツなどはどちらも充実していますが、帝国書院のものを開くと各県の様子を調べることができて、いろいろな方面からの詳細な情報が得られたり、ドローン動画があったり、また、関ヶ原の合戦など歴史上の出来事の地図なども確認できたりと、豊富な情報が得られると思えました。

また、世界の地図のところでは、様々な国の挨拶などを聞くことができ、他教科との活動のつながりも感じられました。

どちらにもありましたが、やはり今、自然災害も多くなり防災意識を高めるような授業をされていると思うので、ハザードマップポータルなどにもつながり、防災意識を高めるような工夫がされているのも良いと思えました。

また、地図帳を実際に開いたときの色合いや配色の問題なのか、帝国書院のほうが見やすく感じるということで、帝国書院のほうを推薦させていただきたいと思えます。

○丸山委員

本当にどちらも甲乙つけ難いですが、見たところ帝国書院のほうがいいと思いました。あくまで主観ですが、配色なども私にとっては見やすかったですし、先ほど三町委員もおっしゃっていましたが、やはり子どもは地図を手にとったら、多分小平市などを探すと思います。小平市と出ているし、さらに玉川上水と書いてあります。玉川上水もあんな小さい川なのに載っている。自分たちの市が地球上のどこにあるのかを意識する上では本当にいい教材だと思います。

具体的に、私の子どものおときはありませんでしたが、自然災害と防災で南海トラフや台風の進路などが書かれていたり、世界遺産が地図上でどこにあるというのがポイントで見られたりすると、やはり興味が沸きます。何よりも、東京書籍でも名産物を地図に落とし込んでいますが、本当に名産のものというのが結構あちこちで見られて、また、フェリーなど、この乗り物は何だろうという興味にもつながりますし、日本だけではなくて世界がこんなに広いのだということを地図で体験すると思うので、色合いなども含めて、私は帝国書院がいいと思いました。

○青木教育長

私もどちらも甲乙つけ難いと感じましたが、どちらかといえば帝国書院を推薦したいと思いました。

理由は4点あり、まず1点目は統計の情報量が多いと思いました。同じ世界の情報を扱っているところで、帝国書院、世界の統計、非常に情報量が豊富だなと両者を見ていく中で感じたところでした。

2点目は、5年生の移動教室の目的地である野辺山原の地形について、教科書でも学び、そして地図で学ぶということができれば興味・関心を持って学習ができると思いました。

それから、先ほどもありましたが、地図の使い方、地図とは何か、真上からの写真と平面の地図を比べて分かりやすく説明しているというところが、地図に興味を持ったり地形に興味を持ったりというようなことにつながるかと思いました。

どちらもQRコンテンツはありますが、やはり情報量や詳細さなどが豊富かと思い、帝国書院を推薦したいと思っております。

皆様のご意見をお伺いしましたが、総括しまして5名とも帝国書院を推薦ということで、地図の議案候補は帝国書院の「楽しく学ぶ 小学生の地図帳」ということにしたいと思いますが、よろしいでしょうか。

－「異議なし」の声あり－

○青木教育長

次に、算数に移ります。算数について、事務局から説明願います。

○岡崎教育指導担当部長

それでは、算数科について説明いたします。

算数科では、数学的な見方・考え方を働かせ、数学的活動を通して、数学的に考える資質・能力を育成することを目指しております。

目標は、第1に、数量や図形などについての基礎的・基本的な概念や性質などを理解するとともに、日常の事象を数理的に処理する技能を身に付けるようにする。

第2に、日常の事象を数理的に捉え、見通しをもち、筋道を立てて考察する力、基礎的・基本的な数量や図形の性質などを見だし、統合的・発展的に考察する力、数学的な表現を用いて事象を簡潔・明瞭・的確に表したり、目的に応じて柔軟に表したりする力を養う。

第3に、数学的活動の楽しさや数学のよさに気付き、学習を振り返ってよりよく問題解決しようとする態度、算数で学んだことを生活や学習に活用しようとする態度を養うと示されております。

○青木教育長

それでは、算数の協議に入ります。算数につきましては、発行者6者から見本本の提出がございました。図書名を申し上げますと、東京書籍が「新編 新しい算数」、大日本図書が「新版 たのしい算数」、学校図書が「みんなと学ぶ 小学校 算数」、教育出版が「小学算数」、新興出版社啓林館が「わくわく算数」、日本文教出版が「小学算数」がございます。

それでは、皆様、ご意見を伺いたいと思います。どなたかご発言をお願いいたします。

○三町教育長職務代理者

たくさんありますが、私は2者ぐらいに絞り込んでみました。

まず、数学的な見方、考え方をするのは誰かということ、子どもがしなければいけないので、子どもがそうするよう働きかけが意図的にされているかを非常に大事に、教科書を見ました。教科書会社によっては見方、考え方といいながら対応のヒントとかテクニクとしか読めないようなものもあったので、それについてははじめから除外させていただきました。どうやって子ども自身がある場面から課題を見いだして、それを解決していく中でそこで学ぶことを身に付けるという形をつくっているかということところです。まず単元の最初の場面設定が大事だと思いますが、教科書会社によっては、単元全体を通して学ぶ内容のうちの前段部分だけの課題の場面設定のところがあり、残念だと思いました。

1つの単元で何を学ぶかということが、トータルで入っているような場面設定の中から問題を見いだして、順次解決していく中で、新しい内容を学んでいくというようなところで見ていくと、例えば4年生では、直線の交わり、平行や垂直、直線が交わる四角形についての学習がありますが、単元のはじめの問題場面から、出てくるものが全部含まれているような課題になっているのが東京書籍だけなのです。これは他のところでも強く見られました。どの会社ももちろん工夫はありますが、最初の単元に入ったところの場面というのは全体が見渡せる、あるいはそれを解決

していく中でこの単元で学ぶものを身に付けさせていくことをかなり強く意識しているのは東京書籍だと思いました。

新しくデータの活用が中学校1年から小学校6年生に下りてきています。6年生を調べてみましたが、データ、つまり統計のところでは6年生だと東京書籍はどこが優勝できそうかというような場面設定でいろいろなデータがある。それを解決するために一連のいろいろなヒストグラムが出てきたり、あるいは表が出てきたり、そういう学習をする中で最終的に出てきたものから考察して、自分なりにデータを読み取って予想をしていくというような展開です。まさにデータを活用していくときの目的に応じて収集して、そのデータを加工、分析して、分析結果を基に自分なりの判断で使っていくという流れがしっかりできている。これは東京書籍と啓林館だけでした。

啓林館も、代表チームの決め方を考えようというところから入る。他は、途中で問題があったり、追及する場面が変わっていくなど、残念に思いました。問題解決的な考え方、あるいは複数の求め方があるときの扱い方などをトータルすると東京書籍が1番かと思います。あえて挙げるならば、次に啓林館だと感じました。

○丸山委員

私も東京書籍がいいと思いました。レイアウトが黒板に板書するような感じで、さらにポイントのところにオレンジ色で問題をつかもう、自分の考えを書き表そうと書かれており、コントラストが効いていて、すごく見えていて分かりやすい。その割に色合い的にすっきりしていて、どちらかというとシンプルなレイアウトになっていると思います。

さらに、問題も、発問があって、ページをめくったところに答えや考え方があり、まず子どもたちに考えさせてから、最終的にページを開いていくという授業の流れをきちんと意識できているので東京書籍がいいと思いました。

マイノートというノートの書き方をどこの学年でも意識していて、もちろんそれ一択ではありませんが、参考として模範的なノートの書き方の紹介があるので、子どもたちも自分のノートに書くときに参考になると思います。

QRコンテンツもすごく豊富で、東京書籍はどの教科も本当に充実していますが、様々な問題もQRコンテンツに入っていますし、QRコンテンツだけではなく単元の後に練習問題もあり、巻末のほうにさらに補充問題というのがあります。加えて、新しい算数プラスというところではいろいろな紹介や、面白問題として少し変わった問題があり、単元以上にもっと面白いこと、興味があるという子のためにもそういう課題があることによってさらに算数への興味が湧くのではないかと思います。

また、QRコンテンツの中で図形を切って動かすとかというような、ただ動画を見たり問題をやるのではなく、実際に図形を動かしたりするコンテンツもとても面白いと思い、東京書籍にしました。

○青木委員

算数はたくさん教科書がありました。幾つかの観点で絞って見てみました。

まず、1年生ははじめて算数に触れるということで、その導入の部分で分かりやすいものになっているかというのを見てみました。それを考えたときに、ノートと一体化した大判になっている教科書がいいのではないかと思ってみると、東京書籍や啓林館、大日本図書は大判でした。

また、その内容は数の扱いについて、東京書籍と大日本図書は40ページ、啓林館は48ページの扱いがあり、さらにいろいろな形ということまで含めて扱っていました。はじめて算数に触れる、授業として数に触れる子どもたちがこの大きく見やすいところに数字を書いたり、そこで一緒に考えたりできるのはとてもいいと思いました。

次に、問題を解決するために必要な数学的な思考力や判断力、表現力などを育める構成になっているか。今までの委員の発言にもありましたように、単元のめあてやまとめが明確で、問いに対して自分の考えをきちんと考える時間を取れるような構成になっているかを考えました。東京書籍はめあて、まとめの表記が大変分かりやすく、前の学習や後の学習とつながりのある単元の表示もされていて分かりやすいと思いました。

これは構成の仕方だと思いますが、問いがあって、その問いの答えが同じページにあったり見開きのページに掲載されてしまっていると、子どもたちはそれを見てその考え方に縛られてしまったり、考える時間を持たないままにそういう解き方があると思ってしまう。問いがあって次のページに考え方が掲載されているという配慮がある東京書籍の構成の仕方がいいと思いました。

例えば、啓林館では見開きに答えが載っていたり、同じ4年生の面積の求め方のところで、他の教科書では考え方が4つぐらい載っているのに、大日本図書では2つしか掲載されていなかったりといった違いも見られました。

3つ目に考えたのが、小平市は全国学力・学習状況調査で、算数は得点が高い教科となっていますので、しっかり定着させていくために練習問題が充実している教科書がいいと思いました。そうしたところを見ると、東京書籍や啓林館は単元ごとの練習問題や巻末の補充問題が充実しており、また、QRコンテンツの中にも理解を助けるようなものが含まれているということが分かりました。

最後に、算数は何で学んでいるのか、とよく思うと思いますので、日常生活との関連について理解を深めているような内容が載っているかを見てみました。日常生活を題材とした教材については大日本図書が大変多く扱っていました。学びにつながるものを扱うコーナーとして、啓林館では「学びをいかそう」、大日本図書では「算数たまたまばこ」、「なるほど算数教室」など、日常生活の中で活用していることを意識づけることができるコーナーがありました。

その辺りを総合的に見て、私が推薦するのは、1番に東京書籍、2番に啓林館、日常生活と関連するというので3番目に大日本図書を推薦させていただきたいと思います。

○望月委員

私も啓林館は結構個人的には好きで、見やすくつくられていると思いました。

先ほど4年生の話が出ていましたが、世界の国々の人口はという表記があり、興味を持てるような形でつくられていると感じました。特に啓林館は、QRコンテンツを算数でも多く作っていらっしゃると思いますが、解説等に関しても動画が入っているなど、非常に面白くつくられていると思いました。こちらが1つです。

もう1つは、東京書籍は勉強する順番がすごく分かりやすくできています。児童も、どのような順番でやっていくのか、今どこを勉強しているかということがすごく分かりやすくつくられていると感じました。特に、東京書籍では大体最初のところに作られている、マイノートというところで工夫の仕方などの記載があるのがすごくいいと思います。

好みが若干出てくるところがありますが、先生方や児童が学んでいくのには、この順番がしっかり分かっていることが一番大事な点になるのではないかとということと、興味を持っていただくというポイントを考えますと、東京書籍がいいと思っています。しかし、啓林館もとても良いと正直思っており、個人的にはこの2択です。

○青木教育長

結論から言いますと、東京書籍を推薦したいと思っております。

理由が5点ほどあり、学習の流れがよいと感じました。教科書の構成、児童の思考の流れに沿った進め方であると感じたのが一番です。

次に、他の委員からも出ていましたが、めあてとまとめという表記がものすごく分かりやすく、算数、数学を学ぶときに、どの教科でもそうですが、特にめあて、そして今日のまとめ、大事なところがこれだというポイントがきちんと教科書で押さえられているということが非常に分かりやすく、いいと思いました。

3点目としては、例題、つまり算数で言えば授業の中に1つないし2つ、今日学ぶ足し算だったり引き算だったりの課題、その例題が明確に示されているということも教科書としては大きいと思いました。

また、練習問題、要するに、算数の流れの中では例題、課題で考えながら解き方を自分で学び、そして練習で定着させていくという流れが大切だと思いますが、練習問題が適切で巻末の補充問題も充実している、それが学力の定着にもつながるだろうと考えました。

最後に、構成上の問題で、1年の上巻のみA4判で大きい。そこが親しみやすく、扱いやすい。その他はB5判で小ぶりで、それも扱いやすくよいと思いました。

あわせて、啓林館も東京書籍もそうですが、特に啓林館はQRコンテンツが充実していると私も感じました。

1・2年生、5・6年生が合冊なので、特に高学年になると、この学習は前のどこにつながっているのかという振り返りができることが合冊であることの利点もあると思いますので、そういうところで評価した次第です。

皆様の意見を総括いたしまして、いろいろなご意見もありますが、一番推薦されたのは東京書籍ということです。望月委員、ご意見などありますか。

○望月委員

結論が出せなかったもので、少し悩みどころではありますが、どちらもいいというところでは変わりはありませんので、東京書籍を進めていただければと思います。

○青木教育長

それでは、東京書籍を議案候補として進めていきたいと思いますが、よろしいでしょうか。

－「異議なし」の声あり－

○青木教育長

次に、理科に移ります。理科について、事務局から説明願います。

○岡崎教育指導担当部長

それでは、理科について説明いたします。

理科では、自然に親しみ、理科の見方・考え方を働かせ、見通しをもって観察、実験を行うことなどを通して、自然の事物・現象についての問題を科学的に解決するために必要な資質・能力を育成することを目指しております。

目標は、第1に、自然の事物・現象についての理解を図り、観察、実験などに関する基本的な技能を身に付けるようにする。

第2に、観察、実験などを行い、問題解決の力を養う。

第3に、自然を愛する心情や主体的に問題解決しようとする態度を養うと示されております。

○青木教育長

それでは、理科の協議に入ります。理科につきましても、発行者5者から見本本の提出がございました。図書名を申し上げますと、東京書籍が「新編 新しい理科」、大日本図書が「新版 たのしい理科」、学校図書が「みんなと学ぶ 小学校 理科」、教育出版が「未来をひらく 小学理科」、新興出版社啓林館が「わくわく理科」でございます。

それでは、皆様、ご意見を伺いたいと思います。どなたかご発言をお願いいたします。

○青木委員

どの教科書も、理科で目標としている部分の問題解決学習の過程を大変分かりやすく示す工夫がなされていると思います。特にその中でも流れが分かりやすいと思ったのが東京書籍でした。問題をつかむ、調べる、まとめる、広げる、振り返るという言葉で示されていますが、その示し

方、文字の大きさ、配置などはとても適切で、写真も大きく、児童がここで何を学ぶのかというのがよく分かると思いました。特に理科という教科を3年生ではじめて学習する子どもたちにとって、分かりやすく取り組めるのではないかと感じました。

また、この理科という教科が身近な生活と関わっていることを示す教材が各教科書に見られ、より実生活の中で捉えられ、学ぶ意義が実感できるような工夫が各教科書でされていると思いました。

特に6年生の気象や土地のつくりなどの学習部分では防災に触れているものが多く、その中でも大日本図書では数ページにわたり取り扱い、近年の自然災害などとの関連づけで学習を深められると思いました。

また、同じ大日本図書では、6年生の燃焼の部分で習ったことを生かそうということでキャンプファイヤーの木の組み方が掲載されており、実際キャンプに行くなどの実生活に結びつくような工夫がされていました。

また、東京書籍の「こんなところにも！理科の世界」というコラムが関連単元に掲載されていて、これも理科をより身近に感じられる内容になっていると思いました。

各教科書、QRコンテンツが用意されていて自宅学習や復習に役立つと思いますが、特にその中で東京書籍、大日本図書は実験や観察のコンテンツが多く、後から見直すこともでき、調べやすいつくりになっていると思います。

また、東京書籍のコンテンツの中には記入ができるデジタルワークシートもあり、これは個人用端末での活用が期待できると思いました。

教科書の内容、QRコンテンツの充実から見て、私は東京書籍と大日本図書の教科書を推薦したいと思います。

○三町教育長職務代理者

私は、東京書籍を推薦したいと思いました。見通しをもって観察、実験を行うことなどを通してということが理科教育の重要な目標の1つですから、学ばせ方を明確に打ち出しているかという視点で見たところ、青木委員もおっしゃっていましたが、それぞれの教科書会社で、理科の学び方や楽しみ方といった言い方で、最初に問題をつかもう、又は、問題を予想、計画して観察、実験結果、まとめと、それぞれの言い方で流れをまずつくっている。それが各単元できちんと落とし込まれているのかを見ると、教科書会社によってはその流れと違う表現で項立てがされていたりします。その点は、東京書籍が一番整合性がある。こういう学び方ですと示し、単元の構成もきちんとその流れでつくられているということで評価しました。

また、導入画面から実験の写真や絵、コンテンツを見ても、東京書籍が一番いいと思います。卵が幼虫になるまでの写真がありますが、キャベツの裏側の写真になっています。ところが、他のところは産んだところだけなどです。卵から生まれて動き出せば上に出てくるかもしれませんが、それまでは裏にあるわけです。事実をきちんと意識して写真を載せているのは東京書籍だと感じたところです。

その他、先ほどありましたが、観察、実験の動画のコンテンツが非常に充実している。また、振り返りのところの理解の問題を比較してみると東京書籍が一番いい。デジタル面でもよさを感じたところです。

トータルして、学ばせ方、写真やデジタルコンテンツ、練習、発展といったところを見て、東京書籍を推したいと思います。

○丸山委員

私も東京書籍がいいと思いましたが、啓林館もとてもシンプルでいいと思いました。啓林館の構成はシンプルですが、問題や実験、観察、結果、まとめというのが明確に分かりやすく並んでいるので見やすいですし、さらに、例えば火は空気が必要だという実験のところ、なぜキャンドルランタンは火が消えないのだろうとか燃えるのだろうといった身近なところからの発問がある実験になっています。啓林館だけではありませんが、わかりやすく流れとして出ているのが啓林館だと思い、他のところに比べて多少地味な感じがしますが、啓林館のシンプルさというのは逆に好感がもてました。

また、その対極にあるのが東京書籍です。写真図版がすごくきれいで大判で、この表紙もそうですが、イラストではなくて写真図版を使っており、発色がとてもきれいなので見ていて現実に近い。もちろん、これは写真ですが、リアル感がすごく出ているので、子どもたちがこういう理科の教科書を手にとったときに、面白い、きれいなど、興味を持つのはやはりこういうものなのではないかと思えます。

皆さんがおっしゃっているように、問題や、観察をしていってさらにまとめがあってという流れも明確にきちんとありますし、「ふりかえろう」のところが最後に手書き風で書いてあります。それが自分たちで振り返って手書きでレポートを書いたような雰囲気になっていて、実際に子どもたちがノートを書く参考にもなりますし、写真ではありませんが、今度それを実際に簡潔に自分の手で書くという意味では、「ふりかえろう」のような手書き風のページはすごくいいと思えました。もちろん、デジタルコンテンツも充実していますので、やはり東京書籍かと思いました。東京書籍、次に啓林館を挙げたいと思います。

○望月委員

私は東京書籍がいいと思ったのですが、学校図書がすごくいいと思っています。まず、非常に子どもが興味をもつようにつくられているというところで、教科書というよりは図鑑を見るような感じになっています。ものすごく興味をもって教科書を見ることができるのではないかと思えました。特にデジタルコンテンツに関して入っているものもそうですが、あえてこういうキャラクター、イカモンスターみたいな形でつくられていてすごく見やすいというのが1つです。

もう1つ、裏側のほうに、大事なことの調べ方や使い方といったものをまとめてあります。振り返りのときにもすごく使い勝手がいいのではないかと思えます。この辺も個人的にはすごく見やすく、使い勝手もよさそうですし、子どもたちも興味をもって使っただけなのではないか

と思い、学校図書を推薦させていただきたいと思います。

東京書籍は、皆さんからもお話が出ており、いいことは重々承知していますが、個人的に一番といたら学校図書だと思いました。

○青木教育長

私は、5者ある中で東京書籍と大日本図書を推薦したいと思っております。1番でいえば私は大日本図書を勧めたいと思いますが、理由は4点あり、実験とまとめなどが分かりやすい構成となっている、これは東京書籍も同じ感想をもちました。

2点目は、もちろん東京書籍も写真は多く使われていますけど、特に単元はじめのページでは大きな写真だとか動画等を扱って、興味、関心をもちやすくなっているというように感じています。

それから、先ほど青木委員からもありましたように、防災教育と関わる単元では自然災害に触れて災害に関する危険性についてできるように配慮している、これは今いろいろな災害が起こっている現状の中でも非常に大事な単元であるなどと思った次第です。

また、デジタルコンテンツが充実しているという、この4点を挙げまして大日本図書を推薦したいと思います。

東京書籍は、先ほど申し上げた他にも観察、実験に関する動画のコンテンツが豊富で、先生方にも扱いやすいのではないかと感じた次第です。

青木委員は東京書籍と大日本図書を両者甲乙つけず推薦されるということによろしいですか。

○青木委員

はい。

○青木教育長

そうしますと、東京書籍を、2番目というのも含めまして4人の委員が挙げております。大日本図書を2名の委員が挙げています。学校図書が1名、それから啓林館が1名ということで分かれています。追加のご意見等がございますか。

○三町教育長職務代理者

私は東京書籍だけにしましたが、実は2番手は啓林館です。練習問題での振り返りのページで解説があるといったところで見ると啓林館になります。あえて3番目というとな教育出版になっています。他の方の意見を踏まえて2つか3つぐらいに絞り込んでいただけたらと思います。

○青木教育長

特にその他にぜひというご発言がなければ、少し多いかもしれませんが、東京書籍、大日本図書、啓林館の3者です。この後また勉強していただいて来週17日に絞り込んでいくということ

で、3社推薦でいかがでしょうか。

○三町教育長職務代理者

望月委員の2番目の候補は何なのか。

○望月委員

私が絞っていたのが、東京書籍と啓林館と学校図書です。1番は学校図書ですが、先生方の進め方というお話であれば、東京書籍が望ましいかと思っています。啓林館もすごく見やすいです。私も先ほどの3者のものをもう一度見直させていただき、次回にもう一度選定をお願いできればと思います。

○青木教育長

今のご発言だと、啓林館と東京書籍の意見が増えましたが、東京書籍、大日本図書、啓林館の3者で17日に議案候補を検討したいと思います。よろしいでしょうか。

－「異議なし」の声あり－

○青木教育長

次に生活でございますが、冒頭に申し上げましたとおり、2時間ほど経ちましたので、ここで休憩を取りたいと思います。4時25分再開といたします。

お疲れさまでございます。

午後4時05分 休憩

午後4時25分 再開

○青木教育長

それでは、休憩前に引き続き、生活から協議を再開いたします。

生活について、事務局から説明願います。

○岡崎教育指導担当部長

それでは、生活科について説明いたします。

生活科では、具体的な活動や体験を通して、身近な生活に関わる見方・考え方を生かし、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を育成することを目指しております。

目標は、第1に、活動や体験の過程において、自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴のよさ、それらの関わり等に気付くとともに、生活上必要な習慣や技能を身に付けるようにする。

第2に、身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、自分自身や自分の生活について

考え、表現することができるようにする。

第3に、身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、意欲や自信を持って学んだり、生活を豊かにしたりしようとする態度を養うと示されております。

○青木教育長

それでは、生活の協議に入ります。

生活につきましては、発行者6者から見本本の提出がございました。図書名を申し上げますと、東京書籍が「新編 新しい生活」、大日本図書が「新版 たのしいせいかつ」、学校図書が「みんなとまなぶ しょうがっこう せいかつ」、教育出版が「せいかつ」、光村図書出版が「せいかつ たんけんたい」、新興出版社啓林館が「せいかつ」でございます。

それでは、皆様、ご意見を伺いたいと思います。どなたかご発言をお願いいたします。

○望月委員

生活に関して、視点をできるだけ子どもに合わせた形で見たところを発言させていただきたいと思います。

個人的に一番見やすいと感じたものは啓林館でした。こちらは見開きから、目次等もそうですが、非常に整理されているということが1つあります。

もう1つは、はさみの使い方やデジタルたんけんブックがありますが、この辺が非常に面白いコンテンツだと思っております。

他にも、東京書籍等は、動画の資料がすごく充実しており、とてもいいと思いましたが、あえて1つということであれば、啓林館が資料等に関して情報もかなり多いので、学校の先生等にも、授業の進行に十分参考にさせていただきやすいものではないかと思いました。

教科書の中に幾つか小さい見開きのような形で工夫があり、非常に興味をそそると感じたところと、親目線でも見ても見やすいのではないかと感じたところが、啓林館を推すポイントだと思いました。

○青木委員

入学して最初に子どもたちはこの生活という学習を始めることになりますが、その学習が興味を持って始められるように工夫されている、写真などが使用されて導入の仕方がよいという点で、3つ挙げさせていただきたいと思います。啓林館、東京書籍、大日本図書で、それぞれいいと思った点を挙げさせていただきます。

啓林館は、植物など種クイズから始まり、成長の過程がとても分かりやすく解説されており、その他豊富な資料で、図鑑を見ているような感じで、動物、植物ともに子どもが興味をもってこの教科に取り組めると思いました。QRコンテンツも含め、このデジタルたんけんブックというものもいろいろな植物や動物を紹介していてよいと思いました。

また、コンテンツの中では教科書全体の動画も見ることができ、教科書以外にも動く動画で確

認することができるのはいいと思いました。

教科書全体として、文字よりも写真やイラストなどが多くなっていて、まだ文字を習いたてであったり、習っていないときでも何をするのがよく理解でき、親しみやすい教科書ではないかと思いました。

次に、東京書籍ですが、学習のはじめの問いかけが、子どもたちの学習の進め方をどのようにしたらいいのかということにつながっていると思いました。また、この教科書は挿絵が漫画的でもなく、人間らしく親しみやすい絵でいいと思いました。さらに、季節や地方などを意識した季節のくらし図鑑が多く入っていて、子どもたちの学習内容としていいと思いました。

大日本図書ですが、これは原寸大の大きな写真を入れていることなど、子どもの興味を引いてこの教科を身近に感じられるのではないかと思います。生活に必要なスキルとっていいのかわかりませんが、電子メールや電話、上手な話し方など生活の中でこれから大切に覚えていかなくてはいけないことも載せていて、そういう扱いがあるこの大日本図書もいいと思いましたので、啓林館、東京書籍、大日本図書の3者を推薦させていただきたいと思います。

○丸山委員

私は啓林館をまず一番に挙げたいと思います。子どもたちが小学校に入学して最初に手に取る教科書のうち、生活というと本当に自分たちの生活と密着しているものなので、入学してからの学校体験やクラスの様子など、まさに自分たちの生活とリンクしている形にこの生活科はなると思います。そういう意味で、啓林館の教科書は写真が多く、実際に自分たちが小学校でやることがまさにそのまま表されているので、本当に身近に感じると思います。写真が豊富なので、昆虫など自然のものの発色もとてもきれいですし、何よりも、他の教科書もおおむねそうですが、四季を通じて進んでいるので、夏や夏休みといったら大きい字で夏休みや夏とあり、秋はオレンジ色のような発色で秋を感じさせるようになっており、子どもたちが四季をこういうものでさらに感じられるのではないかなと思います。

啓林館のもう1ついいところは、見出しや字がとても大きく、すごく見やすいです。説明があまりなく、その見出しがとても目立つので、子どもたちが写真を見て楽しみながら、これは知っている、自分たちと一緒に、自分の生活と一緒に、うちの学校はどうか、といった感じで、想像力を働かせられるのではないかと思います。

もちろん、先ほど青木委員もおっしゃっていましたが、デジタルたんけんブックはデジタルでもさらにそういう画像やその解説を見ることができるという意味では本当にいいですし、子どもたちがタブレットを使っていろいろと観察をしたりしていますが、啓林館では同じようにタブレットを使って植物の観察をしたりしている様子が出ています。

巻末のほうに学習図鑑として、タブレットを使おう、記録しよう、まとめようということも簡潔に説明してあるので、こういうところも見やすいと思ったことも、啓林館を選んだ理由です。

○三町教育長職務代理者

生活科の内容、活動内容そのものは学習指導要領に書かれている内容にどれも即した形の活動ですので、それよりも、小学校1年生ということですから、子どもにとっての親しみやすさや、学びやすさといったところに焦点を当てて見てみました。

私は光村図書出版を一番に推しました。先ほど文字が少なく、という話がありましたが、光村図書出版も説明が少なく、挿絵が多くて非常に親しみやすい構成になっているというのが1つです。

また、特に入学初期の内容や説明が非常にいいと思いました。挿絵そのものも、私はよく知りませんが、ヨシタケシンスケさんという方の挿絵がその年代の子どもにとっては親しみやすいもののように感じました。

次に、活動の中で毎回活動後に振り返りの工夫をした形で、例えば「ふりかえろう」で、水で遊んでどんな気持ちになったかや、こんなことはあったかなと比べた、予想した、工夫したといったことを自分で振り返られるようなものもあるということで、自分がやったことに対する気づき、あるいは次時につなげられる工夫があると、文字や写真、イラスト等の関係では感じたところです。

次に、小学校1年生、最初ということで保護者への配慮について気になって見ていましたが、光村図書出版だけが初期から各単元のところまで、下のほうに保護者の皆様へという説明がありました。こういうものを集めることになるかもしれませんがそのときはよろしくお願ひしますと各単元にある。他のところは、ほとんどが入学初期までや、冒頭に生活科ではこういうのを学ばせますと書いてある程度なのです。そういう意味では保護者にもかなり配慮があるということです。

巻末資料はどこも充実していますが、日頃の生活図鑑があることで、光村図書出版を1番目にして、次を挙げるとしたら東京書籍と考えました。基本的な保護者への配慮等は、他とほとんど同じようなレベルなので、そういうところが光村図書出版は抜きこんでいると思っていますが、それを外して見ると、学習の展開、子どもの気づきから取り組んでいくという流れは東京書籍がいいということで、2番目には東京書籍を挙げさせていただきます。

○青木教育長

私は1者、啓林館を推薦したいと思います。

理由は4点ほどあり、まず、他の会社にもありますけれども、植物の栽培の単元では種のクイズがあって、子どもが興味をもちながら学習に入って行って、それが成長するごとに花になったり、また種になったりというように、成長の種類ごとに違うことに気づくように一貫して数種類の植物の成長が掲載されているという点。

また、豊富な資料があって子どもの気づきや学びがきっかけになる、デジタルコンテンツも含めてということ。

望月委員がおっしゃいました資料と併せて写真が非常に多いので、はじめての教科ですし興味

が引けるのではないかという点。

最後に、身近なものを活用した素材遊びが充実していると感じました。生活科ですからそういうことも大事な視点だと思ひまして、啓林館を推薦したいと思ひます。

それでは、皆様の意見を総括いたしますと、啓林館を4名の委員の方が推薦されています。東京書籍では2名から意見がありました。大日本図書のほうでは1名の委員からご推薦をいただいています。光村図書出版は1名いただいております。追加のご意見等がありますか。

○三町教育長職務代理者

光村図書出版と他との違いがあったのが保護者への関わりというところで、他はあまり差がありません。私も啓林館はイラスト、写真が結構よく、学習図鑑がなかなかいい。また、QRコンテンツもいいものがあるということで評価していますので、啓林館、東京書籍ということですが、皆さんが啓林館ということであれば、私も決してやぶさかではございません。

○青木教育長

青木委員からは、特に順位づけなく啓林館、東京書籍、大日本図書でいただいておりますので、総括いたしまして啓林館が推薦議案となるかと思ひますが、いかがでしょうか。

－「異議なし」の声あり－

○青木教育長

では、次に、音楽に移ります。音楽について、事務局から説明願ひます。

○岡崎教育指導担当部長

それでは、音楽科について説明いたします。

音楽科では、表現及び鑑賞の活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力を育成することを目指しております。

目標は、第1に、曲想と音楽の構造などとの関わりについて理解するとともに、表したい音楽表現をするために必要な技能を身に付けるようにする。

第2に、音楽表現を工夫することや、音楽を味わって聴くことができるようにする。

第3に、音楽活動の楽しさを体験することを通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育むとともに、音楽に親しむ態度を養い、豊かな情操を培うと示されております。

○青木教育長

それでは、音楽の協議に入ります。音楽につきましても、発行者2者から見本本の提出がございました。図書名を申し上げますと、教育出版が「小学音楽 音楽のおくりもの」、教育芸術社が「小学生の音楽」でございます。

それでは、皆様、ご意見を伺いたいと思います。どなたかご発言をお願いいたします。

○青木委員

音楽が日常の生活の中にあるものと実感でき、それを楽しみ、豊かな感性を育むものであるということで考えてみました。今回は2者ということで、どちらも学習指導要領に基づいて編集され、内容も充実しており、それぞれの良さがあり、本当に甲乙つけ難いと感じましたが、2者のうちの教育出版のほうを推薦したいと思います。

理由は、まず、楽譜や目次、学習の進め方についてより分かりやすいという点です。

1年生は、今まで音楽に合わせて体を動かしたりしてきたと思いますが、教科として音楽を習うのははじめてだと思います。導入のときに音に合わせて体を動かすという単元がどちらの教科書にもありますが、教育出版の、特徴的な音に合わせてついつい動作が出てしまう、体が動き出しそうになってしまうような選曲がとてもよいと感じました。各所にリズム遊びなどもあり、学習というのではなく自然に音楽というものに取り組んでいけるのではないかと感じました。

また、巻末の各学年の資料の中に、音楽を表すいろいろな言葉として、音楽鑑賞の際などに役立つ言葉、音楽を表現するときの言葉が幾つか記載してあります。やはり音楽を鑑賞するという授業も出てきますので、こういうものが載っていると扱いやすいのではないかと感じました。

音楽づくりという面で見ますと、各学年の中に何か所か、音楽を作るとは書いていませんが、こういう形でこういうことをしてみようというのが、結局、音楽を作っていくという流れになっていく。その取り入れ方もとてもいいと思いました。6年生になると、本当に曲として作るという部分もありますが、1年生の頃から、それを順番に系統立てて扱っているのがいいと感じました。

また、外国の音楽や英語の歌なども紹介されており、他教科への関連性も図られているという点から、音楽の世界に広がりを感じられました。ストリートピアノなど最近のトピックも載せていて、音楽の身近さやその楽しさを感じることができるのではないかと感じました。

小平市は吹奏楽のまちとして、吹奏楽に力を入れています。教科書の中には、吹奏楽団の中で使う楽器の紹介などもあり、教育出版の動画の中では、その音色も少し紹介されていて、曲を演奏しています。この楽器はどんな楽器なのだろうと、形だけでなく、音なども動画の中から分かるので、吹奏楽のまち小平としては、大変いいのではないかと感じました。

また、教科書に載っている鍵盤ハーモニカの実物大写真は、教科書の上で指使いなども学べてよいと感じます。

全体的に、QRコンテンツの中の視聴も充実していて、音楽を学ぶという意味では大変よいと感じました。少し残念なのが、教育出版のほうにも載っていますが、教育芸術社は日本の伝統的な楽器やまつりなどの扱いがかなり多く、小平市は、鈴木囃子など昔ながらのお囃子などもありますので、そういうものにつなげた扱いができるとうよかったのではないかと感じます。もちろん、教育出版の中にも、日本のまつりや日本の伝統的な楽器の扱いはありますので、それを差し引いても、やはり教育出版の内容が音楽を学ぶのにいいのではないかと感じ、推薦させていただきま

す。

○望月委員

私は幾つかの点を比較した上で、教育芸術社を推薦させていただきたいと思いました。

まず、1年生のところでもそうですが、目次などがすごく見やすいというのはもちろんありますが、リズム、拍の取り方というところが結構あって、身近にできるものであると思います。これが最初のほうにあるのは、身近に感じやすく、すごくいいと思いました。

もう1つ、国歌の君が代について、各学年それぞれの裏側で独立した形で掲載されている。国歌というのは、オリンピックやパラリンピックもそうですが、そういったときに歌っているときちゃんと掲載されています。もちろん教育出版も、見にくいというわけでは全くなく、自分がどちらの教科書を使わせたいかという話をしたときに、身近な、日本の文化のうちの1つである国歌が多めに掲載されているところのほうをぜひ使っていただけたらと思います。

また、教育芸術社は、QRのコンテンツも各ページに掲載がありますので、デジタルとしてもすごく使い勝手がいいと思います。そういう意味でも、教育芸術社を推薦させていただきたいと思います。

○三町教育長職務代理者

2者のどちらかということで、教育芸術社を薦めたいと思いました。学習の学ばせ方や学び方については、両方とも工夫があつていいと思いました。めあても両者とも明確です。あえて比較するならば、私は教育芸術社のほうが、めあてはより明確なのではないかという印象をもちました。

学ばせ方としては、教育出版のほうでは「まなびナビ」という羅針盤のようなものを使って、そこでどういうことを学ばばいいか、大体2点ぐらい挙げている。それに対して、教育芸術社のほうは「考える」、「見つける」、「歌う」、「演奏する」、「つくる」という大きく5つのカテゴリーの中から、その曲に関して3つぐらい挙げて、こういうことを勉強しますと明確に打ち出している。学ばせ方については、教育芸術社のほうに軍配が上がると感じたところです。

内容的には、学習指導要領で「和楽器を含む我が国や郷土の音楽の学習の充実」が明確に打ち出されていますので、それが私の視点に入っていました。

例えば琴の扱いは、教育出版は、演奏というより「聞く」を中心として説明する。爪は生田流と山田流、両方の角爪、丸爪は紹介されていますが、弾いている姿は生田流です。琴に対する向きは1つだけです。それに対して、教育芸術社は、向きも2通り出して、日本の琴は2つあるということをはっきり分かるよう写真でも示している。そういう細かいところへの配慮があると感じました。小学校で演奏はしないのですが、発展としては、チャレンジ、演奏までということで、全体で4ページぐらいとっていたので、そこも大切に扱っていると感じました。

その他の和楽器については、教育出版も篠笛といったものを扱っていていいのですが、篠笛を小平市で使っているかとなると、少し実態に合わないのではないかと。扱いはいいですが、チャレンジは少し違うのではないかと感じもありました。教育芸術社は尺八を使っていて、鑑賞の

みと徹底していました。演奏まで発展ではやらないでしょうから、そこはきちんとわきまえて鑑賞のみになっていました。和楽器に対する扱いでも、教育芸術社のほうが少し丁寧に扱っている、実態に即しながら扱っているのではないかという感じがしました。

望月委員の話にもありましたが、やはり国歌の扱いは、音楽科での指導の大事なポイントですので、どう書かれるのかと思いました。教育出版は、低中高学年のくくりで、君が代の意味と、日本や他国の国旗を尊重するということを発達的に3段階に分けて表現をしている。そのため、内容は同じものが書かれている。それに対して、教育芸術社は、低中高学年で指導を重点化していて、低学年では、日本の国歌であることと込められた思い、願いといったことを説明している。中学年では、儀式で歌いますということを書いている。そして高学年では、それぞれの国歌へのマナーをきちんと書いているということで、扱いとしては、やはり発達を意識して丁寧に説明しているのは、教育芸術社なのではないかと感じました。

先ほどの和楽器関係と同じですが、裏表紙のところに、「伝えよう地域の芸能」というコーナーがあり、小平市といえば鈴木囃子など、地域芸能を意識させるにはいいということで、私は教育芸術社を推したいと思いました。

○丸山委員

どちらも音楽を楽しむ、音楽を聴いて感性を育む、さらに技術を向上させるということで、工夫された教科書だと本当に思います。

結果的にいうと、私はやはり教育芸術社です。

教育出版も、例えば3年生の縦笛のところで、タンギングの動画があります。タンギングは、なかなか教科書を見ているだけでは分からないものを、動画で口の雰囲気や実際にタンギングで笛を吹いている様子が見られ、すごく分かりやすくていいと思いました。教育芸術社にも、もちろんリコーダーの動画はありますが、タンギングではなく、ヘッドピースで音を楽しむということで、いろいろな音を出してみるというものでした。タンギングに関しては、教育出版のほうがいいと私は思いました。

教育芸術社でいいと思ったところが、教科書が見やすく、背景に模様があるところにあまり文字を載せない。歌詞を縦書きで書いていますが、たとえば空のところに歌詞があるときは、白で一回抜いたところに字を書くといった見やすい工夫をしています。どこのページも、どの学年も、なるべく無地のところに字や歌詞を書くという工夫が見られるので、見やすいし、歌詞が目に入ってくる。もちろん写真などもついているので、イメージもできますし、そういう点は、やはり工夫されていると思います。

二次元コードも大体右上のほうに出ている、二次元コードはどこかと探さなくても分かりやすいと思います。二次元コードについては、6年生のコンテンツで、クロームブックを使って、自分で、和音で旋律を作って聞くことができるというものがあります。自分で音楽を作ることが、クロームブックでできてしまう。今、ボーカロイドなどもありますが、やはり今の音楽の作り方というのがあって、そういうものも教科書に盛り込んでいるところがおもしろいと思います。

先ほど、青木委員もおっしゃっていましたが、民俗音楽や伝統芸能もたくさん取り入れられているので、自分たちがいつも聴いている音楽だけではなく、いろいろな種類の音楽が世界にはある、もちろん日本にもあるということを教科書で理解できるので、特に教育芸術社がいいと思います。

○青木教育長

2者のどちらも音楽を楽しむ、音楽の技術を身に付けるということでは評価できると思うのですが、私は教育芸術社を推薦したいと思います。

理由は3点あり、1点は、何を学ばせたいかが非常に明確であると思いました。例えば、1年生のあるページでは、旋律は呼びかけ合う面白さを感じながら聴きましょうとか、ある6年生のページでは、歌詞の表す情景を思い浮かべながら曲想にふさわしい歌声で歌いましょうなどと、すごく具体的で、子どもにも教える教員にも分かりやすい学ばせ方が感じられました。

2点目は、教材ごとにQRコンテンツが右上にあり、音楽を聴いたり、資料を見たりすることができる。

また、デジタル教材が豊富であるという3点の理由から、教育芸術社を推薦したいと考えます。

それでは、総括いたしまして、青木委員はどちらも評価しながらも、教育出版を推していただきましたが、あと4名が教育芸術社を推薦されています。青木委員、何かご意見ありますでしょうか。

○青木委員

本当に甲乙つけがたい中で、良さをどんどん見つけながら、どちらかと考えていたのですが、各委員の意見などを伺いまして、私も和楽器や伝統の楽器、まつりなどについて、教育芸術社のほうが本当に多く扱っていていいと思っていました。

もう1つ、授業で何をすべきかが明確だという点においては、確かに、教育芸術社のほうが分かりやすい。指導する先生方にも分かりやすく、子どもたちも、何を今勉強しているのかというのが分かりやすいという点で、教育芸術社も同じくいい教科書ですので、そちらにさせていただきます。

○青木教育長

それでは、皆様のご意見を総括いたしまして、教育芸術社を議案候補としたいと思います、よろしいでしょうか。

－「異議なし」の声あり－

○青木教育長

それでは、次に図画工作に移ります。図画工作について、事務局から説明願います。

○岡崎教育指導担当部長

それでは、図画工作科について説明いたします。

図画工作科では、表現及び鑑賞の活動を通して、造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の形や色などと豊かに関わる資質・能力を育成することを目指しております。

目標は、第1に、対象や事象を捉える造形的な視点について自分の感覚や行為を通して理解するとともに、材料や用具を使い、表し方などを工夫して、創造的に作ったり表したりすることができるようにする。

第2に、造形的なよさや美しさ、表したいこと、表し方などについて考え、創造的に発想や構想をしたり、作品などに対する自分の見方や感じ方を深めたりすることができるようにする。

第3に、つくり出す喜びを味わうとともに、感性を育み、楽しく豊かな生活を創造しようとする態度を養い、豊かな情操を培うと示されております。

○青木教育長

それでは、図画工作の協議に入ります。図画工作につきましては、発行者2者から見本本の提出がございました。図書名を申し上げますと、開隆堂出版が「図画工作」、日本文教出版が「図画工作」でございます。

それでは皆様、ご意見を伺いたいと思います。どなたかご発言をお願いいたします。

○三町教育長職務代理者

これも2者ですから、比較検討しました。実際に、これを開きながら授業をやるということでもないのではないかと思います。両方とも、先生が見て、こういう題材に関してはこんな狙いがある、あるいは、こういう観点で評価すればいいと学べるようになっていと感じました。

その中で比較すると、題材内容の表現は、どちらも造形遊びや絵、立体、工作、鑑賞といったものが扱うところで明確に書かれています。日本文教出版は、造形遊びをしたり絵を描いたりした後は、必ずその中で、お互いに鑑賞し合う活動が入っています。それを全て中黒でつけている。開隆堂出版は、鑑賞は、特別な何かを見るときとしている。造形遊び・鑑賞や、絵・鑑賞と書いてあり、分かりにくい部分で、ここは比較になりませんでした。

開隆堂出版の場合は、最初のところに、造形遊びというのはこういう活動です、あるいは、絵というのはこういう活動ですと分かるよう、具体的な写真を載せています。どういう活動をするのが造形遊びなのだ、工作なのだと分かるようになっており、そこは分かりやすいと思い、開隆堂出版にポイントが入りました。

次に、めあての示し方は、「くふうさん」「ひらめきさん」「こころさん」としているのが開隆堂出版。日本文教出版では、技能のことを言っているのではないかと思います。工夫は手、ひらめきが電球、こころさんは笑顔。つまり、主体的に学習に取り組む態度である3観点がよく書いてある。そこで比較すると、開隆堂出版は、その3観点の中で、特にこの題材については、この観点、と重点化しています。それぞれを明確にはっきりと大きく書いてある。それに対する

振り返りも、当然、焦点化しためあてに対する理解がついている。日本文教出版は、振り返りのところは、めあてとの関連が少し分かりにくい。開隆堂出版のほうが、めあての示し方と同時に、めあてを焦点化して、さらに、振り返るときには、3観点の中の焦点化したもので見ていくといったところに違いがあるのだと感じました。

本文の内容、道具の扱い方については何とも言えませんが、あえて言うなら開隆堂出版です。

○丸山委員

日本文教出版も開隆堂出版も、本当に図版が多くて、図画工作が楽しい、ものづくりは楽しいといった感じが教科書から伝わってくるものとなっております。作る楽しみだけではなく、やはり感性を育むというところが図画工作では重要だと思い、先ほど三町委員から、絵・鑑賞や工作・鑑賞という話がありましたが、作って、さらに友達同士で鑑賞し合うというところが日本文教出版の求めているところではないかと解釈しました。いろいろな子どもたちの作品もありますが、いろいろなアーティストの作品も開隆堂出版よりも多く掲載している印象を受けました。やはりいろいろな作品を見て想像力を膨らませる。まさに感性を育むということで、私は、日本文教出版がいいと思いました。

開隆堂出版も日本文教出版も、道具の紹介や基本的な道具の使い方を動画などで見せたりしているので、そういう意味ではどちらもすぐれてはいますが、どちらかというと、ICTを活用してコマ撮りアニメーションを作るといった、新しい素材というか、課題に取り組んでいるのは日本文教出版だと思います。

最後に、5年生のところで、「美術館へ行こう」というページがあります。開隆堂出版は、美術館を楽しもうという視点で、いろいろな美術館の紹介をし、走ってはいけない、静かに見るといったそこでの鑑賞の方法について書かれています。日本文教出版は、美術館はどのようなところが明確に書いてあります。美術館は、資料を収集し、保管して、調査・研究をして、展示するということです。美術館はどのようなことをしているところが明確に説明されている日本文教出版がいいと思い、これを挙げました。

○青木委員

どちらも子どもたちの作品をたくさん載せ、いろいろな作品を紹介して、見るだけで何かを作りたくなるような工夫がされた教科書だと思います。良いところを探して、私も日本文教出版を推薦させていただきたいと思います。

教科書を開くと、どの学年のところにも、保護者の方へという言葉があるのですが、こういう姿勢で子どもたちが図画工作を学ぶのだ、親はこういう気持ちで見守るのだというのがはっきりしました。少し読みますが、保護者の方へとして、見たり作ったりする中で、想像を広げながら、自分にとっての価値を創造する力を育てていきます。また、自分と違う感じ方や考え方をする友達とお互いに認め合う心を育てていきます。子どもたちが感じたことや考えたことを大切にしながら、活動や作品を見守ってあげてください、と書いています。図画工作に対する姿勢がはっき

りしていいと思いました。

そして、内容も、作るということだけではなく、鑑賞にもすごく重点を置いていて、子どもの作品を見ることもそうですし、先ほど丸山委員の発言にもありましたように、芸術家というか、美術館にあるような絵や作品も鑑賞するというので、QRコンテンツも含め、大変多くの作品の紹介があると思いました。「美術館へ行こう」というコンテンツや、「美術カード」として本当に有名な作品なども様々紹介していて、自分の好みはどのようなものかなど、いろいろ動かしながら選べたりする内容になっていたと思います。鑑賞する中で自分の感性も磨いていくという方法がとてもよいと思いました。

先ほど丸山委員の発言にあったように、コマ撮りアニメーションということで、自分で端末を使ってアニメーションを作るという教材もあったり、ICTでチャレンジというページがあったり、また、プログラミングで空間を作るというような、これからの新しい取り組み方、作品の作り方というのも紹介し、挑戦してはどうかと提示しています。そうしたことから、どちらかといったときには、日本文教出版の「図画工作」を推薦させていただきたいと思います。

○望月委員

私も日本文教出版が望ましいと思っております。こちらに関しては、ICTチャレンジでプログラミングなどを混ぜてできるということがいいと思ったのが1つと、もう1つは、ユニバーサルデザインです。どのページも左上のところにポイントが書いてあり、すごく分かりやすいです。右下には作り方や作品、全て二次元コードがあり、1枚の中ですがかなり情報量が詰まっていると感じたところです。1ページ目から全てそうですが、ポイントや注意点、振り返りなど、この見開きの1ページの中で完結ができる作り方をしているというのは、なかなかすごいというか、おもしろいと思いました。絵等もいろいろと掲載されていますので、本当にいろいろと考えられて作られたものだと感じた次第です。

もう1つあったのですが、思い出せませんので、以上です。

○青木教育長

どちらもたくさんの資料なども盛り込んで、楽しそうな教科書だと思いました。どちらかということで、私も日本文教出版を推薦したいと思います。

理由を4点挙げさせていただくのですが、東京都の資料も拝見しまして、絶対的に作品の数が多。皆さんもおっしゃっていましたが、やはりたくさんの作品に触れることは大切かと思いました。

2点目が児童の知的好奇心を引き出すために、実際の授業風景の写真が多く掲載されているというのが特徴だと思います。全身で材料を味わう姿など授業で見られる表情から、児童自身が主体的、対話的な学びの姿を捉えられるように工夫されているのではないかと思います。

3点目は、材料と道具の引き出しというところがあり、そこに基本的な道具の扱い方やポイントが示されており、こちらのほうがより引き出しと実際の授業の内容とが正対していると特に感

じました。安全な道具の使い方などの知識や技能に関わる情報が充実していて有効であると思いました。

4点目は、QRコンテンツが有効であるということでございます。

三町委員は、どちらも評価していただきながら、開隆堂のほうを第一優先で推薦されていたのですが、いかがでしょうか。

○三町教育長職務代理者

私は、学習のめあてやそれに対する焦点化した学習内容、そして、その振り返りの仕方というところでの違いを比較し、開隆堂出版とただけであって、皆さんからお話あったところについては、十分すぐれている、十分に活用できる部分だと認識しておりますので、こだわるところはありません。日本文教出版で大変結構なのではないかと思えます。

○青木教育長

望月委員、もし推薦理由を思い出したようでしたらお願いします。

○望月委員

「わざのひきだし」という項目があります。これをどうやってやるのかというものについて、ヒントではありませんが、このような形で子どもたちに見せる工夫がされているというのはすごくいいと思いました。子どもたちが実際にこれを見て、よし、ではやってみようと思ってもらえるような、そういう工夫があるというところをお伝えしたかった次第です。

○青木教育長

それでは、皆様のご意見から、日本文教出版の「図画工作」を議案候補としたいと思えますが、よろしいでしょうか。

－「異議なし」の声あり－

○青木教育長

次に、家庭に移ります。家庭について、事務局から説明願います。

○岡崎教育指導担当部長

それでは、家庭科について説明いたします。

家庭科では、生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して、生活をよりよくしようと工夫する資質・能力を育成することを目指しております。

目標は、第1に、家族や家庭、衣食住、消費や環境などについて、日常生活に必要な基礎的な理解を図るとともに、それらに係る技能を身に付けるようにする。

第2に、日常生活の中から問題を見いだして課題を設定し、様々な解決方法を考え、実践を評価・改善し、考えたことを表現するなど、課題を解決する力を養う。

第3に、家庭生活を大切にできる心情を育み、家族や地域の人々との関わりを考え、家族の一員として、生活をよりよくしようと工夫する実践的な態度を養うと示されております。

○青木教育長

それでは、家庭の協議に入ります。家庭につきましては、発行者2者から見本本の提出がございました。図書名を申し上げます。東京書籍が「新編 新しい家庭」、開隆堂出版が「わたしたちの家庭科」でございます。

それでは皆様、ご意見を伺いたいと思います。どなたかご発言をお願いいたします。

○三町教育長職務代理者

先ほどの図画工作以上に悩んだところです。東京書籍はかなり問題解決的な学習を意識した構成になっていて、それに基づいて作られているという印象ありますし、開隆堂出版は、調理や被服製作をかなり重点的に扱っている印象を持ちました。

流れは、東京書籍はステップ1、2、3という3段階、開隆堂出版では「気づく・見つける」、「わかる・できる」、「生かす・深める」の3段階で、構成的には同じような作りになっている。違いは東京書籍のステップのタイトルに、ステップ1のところでのめあてがあり、ステップ2のところのめあては教科書の流れの中でこういうものだというのに対して、開隆堂出版は、冒頭のところにそれぞれの段階での3種類のめあてが書いてある。問題解決的な流れの表現では東京書籍のほうが上手だと感じました。例えばみそ汁づくりのところ、みそ汁づくりの後に、食事の役割と栄養のバランスを考えようとなっている。つまり、みそ汁を作った後で、食事のどんな役割があるのだろうか、次のステップに上がっていくイメージです。そのため、流れを感じるのですが、開隆堂出版のほうは、みそ汁づくりの後に、食べ物に含まれる要素という学習です。内容は同じですが、問題解決の流れからするとタイトルのつけ方が少し不自然ではないかと感じました。調理の流れを見ると、東京書籍よりも開隆堂出版のほうが視覚的によくまとめられていると私は思います。

実技教科のため、手元の写真も大事だと思って見ましたが、どちらも左利きへの配慮がありました。写真も大きくて分かりやすいです。1つ違ったのは、東京書籍は黄色の布を縫う写真を使用しており、手の色と布の黄色が沈んで見えるのです。それに対して、開隆堂出版はあえてイラストで描いています。イラストに色をつけているので見やすい。そういう工夫があるのはいい。被服の中では、そういうことを意識して開隆堂出版は作っている。

安全面では、じゃがいもの扱いで開隆堂出版だと思ったのですが、じゃがいもの食中毒に関する注意事項は圧倒的に強い。はっきりはしませんでした。小平市で、そうではないかと思われる事案が起こったと聞いておりますので、大きく扱っている開隆堂出版のほうがいいという感じもして、本当に悩みましたが、開隆堂出版にさせていただきました。

○青木委員

どちらもふんだんに写真やイラストを使って分かりやすく構成されているという点では、甲乙つけがたいと感じました。

先ほど三町委員の発言の中にあつた、授業での視点、めあてについては、私は開隆堂出版の提示の仕方、表示の仕方が、その単元の最初に大きくはっきりと書かれていていいと思いました。

開隆堂出版は、いろいろな手順が必ず一列で示されていて、調理にしろ、技術にしろ、教科書を開いたときに一列で大変見やすく理解しやすい表示の仕方だと思いました。

また、情報量としては、開隆堂出版は4年前の改訂のときから、教科書の大きさを変え、違いがなくなったようですので、今後生活に必要な知識などが十分含まれているという点では、どちらも本当にすばらしいものだと思います。

ちょっとしたことですが、日本の伝統の食文化や食器、行事食、お茶の入れ方などの説明やイラスト、写真が、開隆堂出版のほうが適切で分かりやすいと感じました。

東京書籍のQRコンテンツの中に、ワークシートやトライシートというものがあり、こちらが大変よくできていて、本当に授業のときに利用価値のあるものだと思います。個人で学習していくときにもいいのではないかと感じます。

また、安全面ということで、東京書籍は、巻頭のガイダンスの後に衛生や安全の確認のページがあり、やはり家庭科ということで、安全面を重視しなくてはいけないというところを大切に扱っていると感じました。

どちらも本当にいいところが幾つかあり、選びづらいのですが、やはり教科書の見やすさ、流れの分かりやすさという点、見開きで調理も被服もいろいろなことが理解しやすいということで、開隆堂出版を私は推薦させていただきたいと思います。

○望月委員

私は、結論から申し上げますと、開隆堂出版がいいと思い、推薦をさせていただきます。

1つは、学習のめあて等に関しては、非常に大きく書かれているので分かりやすいというところ です。

また、クッキングのところを見たのですが、取ってきたものが最終的にどうなっていくかを絵で描いて、結構はっきりと大きく掲載されており、イメージしやすくいいと思いました。

先ほど、三町教育長職務代理者からお話がありましたが、ソーイングの部分に関しては、どちらがいいのかと私も思っていたのですが、絵で表示されていて、よりイメージがしやすい。写真も併せてありますが、どういうふうになっているのかがより分かりやすくいいと感じました。

できたかなというポイントの確認のようなどころもあり、ボタンつけなど、生活ですごく必要とされる、密着しているところに関して、ポイントをきちんとまとめています。

個人的にすごくいいと思ったところが1つあり、開隆堂出版では「キャリアインタビュー」という言葉がありますが、東京書籍のほうは「プロに聞く」という言い方をしています。全部数えたわけではありませんが、開隆堂出版はキャリアインタビューが掲載されている数が多いと思

ました。キャリアインタビューは、こういう仕事があるのだというイメージもありますが、プロという、少し上に出ていってしまっている部分があります。キャリアインタビューということで、こういう仕事があって、親近感が湧くというイメージをすごく感じました。そういったコメントが結構掲載されているのは、生活に密着しているというところでは、すごくいいのではないかと思いますので、開隆堂出版を推薦させていただきたいと思いました。

○丸山委員

私も結果からいうと、開隆堂出版です。もちろん両者とも図版が多く、めあても見やすくなっていて、どちらが選ばれてもいいと思います。

特に、開隆堂出版の巻末には、防災やプログラミング、SDGsなどの説明や資料も結構豊富に書かれていますし、望月委員もおっしゃっていましたが、キャリアインタビューだけではなく、いろいろな人のインタビューが結構全体に入っています。ただの小さな記事ですが、そういうもので、いろいろな職業があることや、いろいろなプロの人がいるということを知るのもいいと思いました。まさに、この家庭科というのは、料理をしたり、洗濯をしたりと、生活に密着した実践的、体験的な学習だと思います。生活に密着しているというところで、学校だけではなく、やはり社会があって自分たちがいるという意味で、そういうインタビューも有効だと思い、開隆堂出版にしました。

個人的におもしろいと思ったのが、風呂敷の説明などのトピックです。風呂敷のところにはSDGsとは書いていませんが、やはり風呂敷もエコや環境問題などにもつながっていくものですので、そういうトピックが見ていておもしろいと思いました。もちろん課題ごとに、できたかなというチェックするところや、感想を書き込んだりするところも結構多いので、これだけで授業が完結するのではないかと思います、開隆堂出版を選びました。

○青木教育長

本当にどちらも、やってみたい、使ってみたいという印象の教科書だったと思います。両方とも写真が豊富で、適切に使われており、二次元コードも充実していますし、じゃがいもの安全面も扱っていただきましたので、甲乙つけがたいと思いました。

東京書籍は、学習の振り返りとして成長の記録がある。これは子どもにとっても、指導者にとっても使いやすいのではないかと思います。結論から言いますと、本当に同じようなのですが、開隆堂出版のほうが日本の食文化のことなどの写真が豊富に使われていて、こちらのほうがいいかと思います。確かに、先ほどの黄色い布に肌の色というような配慮も、開隆堂出版のほうがイメージとして湧きやすいのではないかと思います、開隆堂出版を推薦したいと思います。

それでは、総合的に意見を総括いたしまして、開隆堂出版の教科書を議案候補としていきたいと思いますが、よろしいでしょうか。

－「異議なし」の声あり－

○青木教育長

次に、保健に移ります。保健について、事務局から説明願います。

○岡崎教育指導担当部長

それでは、体育科における保健領域について説明いたします。

体育科における保健領域では、体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題を見つけ、その解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成することを目指しております。

目標は、第1に、その特性に応じた各種の運動の行い方及び身近な生活における健康・安全について理解するとともに、基本的な動きや技能を身に付けるようにする。

第2に、運動や健康についての自己の課題を見付け、その解決に向けて思考し判断するとともに、他者に伝える力を養う。

第3に、運動に親しむとともに健康の保持増進と体力の向上を目指し、楽しく明るい生活を営む態度を養うと示されております。

○青木教育長

それでは、保健の協議に入ります。保健につきましては、発行者6者から見本本の提出がございました。図書名を申し上げます。東京書籍が「新編 新しい保健」、大日本図書が「新版 たのしい保健」、大修館書店が「新 小学校保健」、文教社が「新 わたしたちの保健」、光文書院が「小学保健」、Gakkenが「新・みんなの保健」でございます。

それでは皆様、ご意見を伺いたいと思います。どなたかご発言をお願いいたします。

○望月委員

私が小学生ぐらいのときを考えると、このような勉強をした記憶があまりなく、小学3年生からこのような勉強をするときに、どういったことが求められるのかと思いました。体育の時間と一緒にですから、なぜこの勉強をしなくてはいけないのかということをしっかり明確にさせていただくのはすごく大事なことはないかと思いました。そういった点から、私は、光文書院がいいと思いました。

最初のページに、どうして保健を学ぶのかという項目がありました。なぜというところからスタートをしているので、だからこういったことは勉強しなくてはいけないのだと、子どもたちにも、また、親目線で見てもすごく分かりやすく記載がありました。この冊子の中に直接書き込みをすることもできるようになっていますので、この1冊で完結できるような流れができていると思いました。振り返りも十分できると思いましたし、実際に何のためにといいところもきちんと細かく書いてあります。

後半のほうですが、防犯のことについても結構きちんと書かれており、また、増える病気、喫煙のことなどもしっかり掲載されていると思いました。特に日本ですが、喫煙のことはさておき、

災害等もかなり多いので、この辺のこともしっかりと掲載されているところはすごくいいと思いました。

また、二次元コード等に関しても、やはり補足の資料が結構きちんとしていますので、動画資料に関しても、ページごとという形で掲載もあり、すごく望ましいのではないかと思います。

○丸山委員

どれも本当にいいのですが、やはり今、望月委員がおっしゃったように、光文書院の教科書は最初に、どうして保健を学ぶのかという項目があり、他の教科書はあまりそういうことを書いていなかったのので、インパクトが強く、分かりやすいという意味で、光文書院がいいと思いました。

もちろん中身についても、手を清潔に保つということについて、菌が繁殖しているところや、手を洗う前、洗った後のことだけではなく、ささくれのところも菌がたまっていると、分かっていて見落としがちところが視覚的に説明されています。安全や健康といった視点では、やはり重要だと思い、光文書院がいいと思ったところです。

また、インターネットのトラブルやAED、災害についてというのも結構細かく書いてあり、特に光文書院は、シンプルに教科書を作られていて、逆にそれが分かりやすいと思って選びました。

○青木委員

保健という薄い教科書の中に、これから子どもたちが将来にわたって心身の健康を維持増進して生きていくために必要な情報がしっかりと盛り込まれており、しっかり定着させたい内容だと思いました。子どもの立場からすると、教科書とノートが一体化しているものいいかと思いましたので、光文書院と東京書籍の教科書について見させていただきました。どちらも二次元コードを使って、コンテンツは本当に充実しており、差がありません。

1つ大きく気になったのが、性に関するところで、性の多様性への配慮が必要かと感じた表現がありました。異性が気になるというところです。東京書籍では、必ずしも異性ではなく、他の人のことが好きになったり、気になったりとして、配慮をした表記がありました。これから先、ますます配慮しなければいけないところになってくると思います。4年間使う教科書ですので、そういうところまで気を配って構成されているということで、私は、その部分では東京書籍を1番として、ノート代わりとして本当にコンパクトにまとめられているということで、光文書院を2番ということで推薦させていただきたいと思います。

○三町教育長職務代理者

私は、結論としては、1番にG a k k e nを推しました。2番目に光文書院です。ポイントは、やはりどの教科書もそうですが、基本的に学習のさせ方、アクティブラーニングについてどうなっているかというところです。それぞれ保健の分野で学習課題を見いだす場面を設定はされています。G a k k e nの場合は、1つの単元で見いだす場面を重視して、1ページ使っており、そ

これから学習課題を見つけ出し、過去を振り返りながら予想して、課題は何だと確認して学んでいく。そして、調べたり、確かめたりという流れになる。光文書院も、自分の生活を振り返り、そこから見いだすという形で、それも流れとしてはいい。あまりにも課題をつかもうというところが少なかったり、はじめから今日はこれとこれをやるといった形でまとめて出していたりする教科書は、追求の仕方としては少し違うのではないかと思います、4者に絞り込ませていただきました。

そういう学習の流れの中に各段階に対してのメモがあって学べる、教科書で学んでいける、あるいはメモを入れて1つのまとめになるということでは、それぞれの教科書会社も工夫されていました。私が意識的に見たのは、4年生の思春期の体の変化の扱いです。性に対しては、非常に個人差が大きいので、基本的なところまではきちんと押さえる。発展的なものは、個別対応になるのだろうと私は思っていますので、どの程度の扱いになっているのかと見たところ、まず、裸の絵は必要ないと思いました。図で裸の全身を描く必要はない。基本的に脳が発達する中で男性器、女性器を成長させていくことが分かるような図であればいいのです。その点では、光文書院と大修館書店とG a k k e nに絞られました。

さらに、先ほどの性の多様性についてのところですが、LGBTについて自分なりに見てみました。発展的な扱いとして光文書院、東京書籍、大日本図書、G a k k e nとあったわけですが、私は少し青木委員の意見とは違い、東京書籍も非常にいいのですが、小学校4年生では難しい。発展で性と自分らしさということで扱って、体と心と相手、つまり自分の体との違いや心の問題とあるのですが、それを自分らしさという形で扱おうとするので、少し難しいのではないかと。自分を変だな、どうすればいいのだろうといった性についての悩みを相談できるような、いろいろあるのだから相談しましょうというような扱いで書かれているものがあるのではないかと思います。これは光文書院とG a k k e nだと思いました。東京書籍は、発達からすると、かえって難しくなるのではないかと思います。5年生の心のつながりで、心の健康というところでは、光文書院もG a k k e nも、学習上、示されたような内容を書きながら、悩みの解消法を友達と相談し合うといった形での取組として表記されている。

そうしたことから、内容的に見ると、G a k k e nが一番子どもたちにはいいと推薦させていただきました。

○青木教育長

私は、東京書籍を推薦したいと思っています。

理由は4点ほどあり、他もそうですが、特にQRコンテンツが充実していて、学びを深め広げることができると感じました。

それから、単元が4つのステップ構成になっているということが学習しやすいと思いました。

3点目は、今、青木委員や三町委員からもありましたが、やはり性の多様性について扱っているということの評価しました。

4点目は、そうした中で、犯罪被害の防止について、会社によっては発展や、1時間の授業として扱っていない会社もありますが、東京書籍は、犯罪被害の防止ということについて、1時間

の学習として取り扱っているということを評価して、東京書籍を推薦しようと考えました。

これも分かれたのですが、順番にかかわらず、光文書院を4名の方が推薦しております。東京書籍を2名の委員が推しております。G a k k e nを1名の委員が推しているということで、3者になっています。6者ありますので、3者について、次回、もう一度検討ということもできると思うのですが、追加のご意見がございましたら、お願いいたします。

○三町教育長職務代理者

先ほど言いましたように、思春期の体の変化に関する教科書での扱いについて、私がやはりこだわるのは、絵であっても裸が必要なかどうかということです。そこは、次回に向けて幾つか残ったとしたら、もう1回それぞれの委員の目でどこまで必要なか見ていただきたい。あってもいいのですが、なくてもいいようなものは扱わず、必要なものはきちんと教えていく。そういうことが必要なのだと思いますので、ぜひそれを見て絞り込んでいただきたいと思います。

○青木教育長

他の委員はいかがでしょうか。

特になければ、先ほど申し上げたとおり、3者を候補として残して、次回までに、今、三町委員からありましたように、裸のイラストはどうなのかということも含めて、皆さんの意見を改めてご確認いただいて、絞り込んでいきたいと思います。

では、光文書院、東京書籍、G a k k e nということで、次回までに選んでいきたいと思いません。

では、次に参ります。次に、英語に移ります。英語について、事務局から説明願います。

○岡崎教育指導担当部長

それでは、外国語科について説明いたします。

外国語科では、外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成することを目指しております。

目標は、第1に、外国語の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて、日本語と外国語との違いに気づき、これらの知識を理解するとともに、読むこと、書くことに慣れ親しみ、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるようにする。

第2に、コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、身近で簡単な事柄について、聞いたり話したりするとともに、音声で十分に慣れ親しんだ外国語の語彙や基本的な表現を推測しながら読んだり、語順を意識しながら書いたりして、自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができる基礎的な力を養う。

第3に、外国語の背景にある文化に対する理解を深め、他者に配慮しながら、主体的に外国語

を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養うと示されております。

○青木教育長

それでは、英語の協議に入ります。英語については、発行者6者から見本本の提供がございました。図書名を申し上げます。東京書籍が「NEW HORIZON Elementary English Course」、開隆堂出版が「Junior Sunshine」、三省堂が「CROWN Jr.」、教育出版が「ONE WORLD Smiles」、光村図書出版が「Here We Go!」、新興出版社啓林館が「Blue Sky elementary」となっております。

それでは皆様、ご意見を伺いたいと思います。どなたかご発言をお願いいたします。

○青木委員

英語の教科書は、前回の採択で初めて選ばれたものを4年間使ってみた結果を踏まえてということだと思います。中学に向けて、やはり苦手意識を作ってはいけないので、楽しく取り組めて、中学にそのままつなげられるもの、実際に使える英語になっていくことを考えて教科書を見ました。

市民アンケートの中に、現行の教育出版の教科書が使いやすく、学ばせやすいということで推す意見が幾つか見られましたので、教育出版の今使われているものを見てみたところ、やはり身近な内容が扱われ、絵カードもたくさんあるので、それを使って会話の練習が繰り返しやすいになっているのがよいと思いました。

また、音声と文字というコーナーがあり、フォニックスの扱いもされており、文字と音に慣れ親しめるような工夫がされていて、中学への接続が期待できるものだと思います。この教育出版の教科書を現行使っているようですが、子どもたちにも使いやすいのではないかと思います。

しかし、教育出版の教科書については、読ませる記事が少なく、書くことを扱う部分が少ないということも調査から分かっています。小平市では、英語の専科や英語講師を配置して質の高い授業が行われていると思います。5、6年生で使うこの教科書では、中学での読み書きに対応できるような、書いたり読ませたりするという部分ももう少し増やせたらいいと思い、他の教科書を見ました。

私は東京書籍と三省堂の教科書もいいのではないかと思います。東京書籍は、絵カードの数は減りますが、会話スピーチの扱いが十分にあり、QRコンテンツの中でも会話練習ができるようになっています。また、フォニックスについては、QRコンテンツのアルファベットの練習の中にも含まれておりますし、十分に子どもたちが耳慣れしていくことができると思います。

三省堂のほうは、絵カードが大変充実しており、都の調査報告書からも、聞く、書く、読む、やりとりする、発表するの4技能、5領域のバランスがとてもよく設定されているということが分かります。

また、教育出版では、別冊のワードリストのようなものはありませんが、東京書籍と三省堂に

はワードリストが別冊であります。教育出版よりたくさんの語彙を掲載しており、ワードリスト自体もとても楽しんで見られるものになっています。それを全部覚えるというわけではなく、やはり英語に親しむときに、少しでもたくさんの英語に触れられたらいいということでは、単語もたくさん載っているのはいいのではないかと思います。

少し方向性は違うのですが、教育出版と東京書籍と三省堂、その3者を推薦させていただきたいと思います。

○丸山委員

やはり外国語を難しく嫌いになっては困るので、まずは楽しみながら、もちろん書く、読む、話す、といった基礎的な技能を身に付けることは十分必要なのですが、その前の段階というものやはり必要なのかと思います。そういう意味では、私は教育出版がやはりビジュアル的に楽しく学べる教科書かと思いました。さらに、この教育出版は、フォニックスも意識しています。発音はこれからずっと必要になってくるので、そういうものを身に付けることで、今後の継続した学習にもいいのではないかと思います。

実際に先生方がALTと授業をするのを見ることがありますが、積極的に会話をしています。教育出版では、コミュニケーションとして会話をするという部分がたくさんあり、授業では使いやすいのではないかと思います。コミュニケーションといっても、なかなか難しいですが、異文化理解や国際理解、さらに日本の自分の文化の理解、国際感覚を身に付けるという意味では、やはり外国語の学習は重要ですので、そういうことを意識しているのは、教育出版や東京書籍だと思います。

実際に写真やイラストなどで外国の様子や文化がたくさん紹介されていますし、二次元コードでも見ることができるので、子どもたちが世界のいろいろな文化の多様性を見るという意味でもいいと思います。

もう1つ、巻末に絵カードなど、いろいろなカードがついており、楽しみながら、手を使ってやるというのも授業では効果的なのではないかと思います。巻末にそういうものがたくさんついているのも教育出版です。また、ワークシートなどもついているので、総合的に見たときに、やはり教育出版なのかと思います。

もちろん、他のところも十分いい教科書であり、教育出版の他に、青木委員と同じく、東京書籍、三省堂もいいのではないかと思います。

○三町教育長職務代理者

大変難しいです。ここがいいからこれ、ということが言えず、ポイント制で考えました。例えばフォニックスについては、教育出版はいいのではないか。あるいは光村図書出版、啓林館がいいのではないか。巻末でいえば、絵カードがきちんとついていて、しかも切り取って使いやすい。東京書籍は少し少ないC a n d oのリストであり、それに近いものとしては、開隆堂出版や光村図書出版、啓林館がそれぞれ○。異文化理解、特に自国の文化を説明するというような活動の

視点はどうか。

トータルの点数ですと、教育出版と開隆堂と啓林館が残り、絞り切れていません。これから絞り込まなければいけないと思います。

○望月委員

私は中学校に入ってから勉強でしたので、小学生が同じように英語を勉強するのが当たり前になってきている中で、どういったところがいいのかといろいろ思っていました。

1つは、やはり見やすいとか、導入のしやすさというところがあると思いました。教育出版と東京書籍がすごくうまくできていると思いました。ただし、先ほどの青木委員の話のように小平市の英語のレベルが、私が思っている以上に高いとしたら、物足りないという話になる可能性がゼロではないとも思っています。それを思うと、開隆堂出版がいいのではないかと思いました。かなりボリュームもあって、他のものよりはすごくレベルが高く作られているようなイメージを受けます。そういうところでも問題がないということであれば、開隆堂出版はいいと思います。

その上で、東京書籍は、個人的にはすごくいいと思っています。ポイントとして、日本のことに対して、英語で説明をしましようというのが結構多く出てきます。今、日本には海外から多くの方が来ています。都内ですが、普通に観光に来ている方もすごく多いので、身近な機会として外国の方を見ることが増えるのではないかと特に思っています。年を追うごとに、そのような状況になってくるとも思っていますので、児童から見ても日本のことだったら興味を持って話ができるのではないかと。そういったところから、東京書籍の内容は、児童としては親しみやすく入っていけるのではないかと考えた次第です。

もう1つ、東京書籍のコミュニケーションカードもおもしろいと思っています。I canと書いてあるものです。授業で使うようですが、特に、コミュニケーションを図ろうとする態度の育成というところからですので、すごく使い勝手がいいのではないかと思いました。

1点、英語の文字を書くためのラインに関して、三省堂だけが均等にとられています。今は比較的、下の部分のところが少し大きめに書かれていますので、学校の先生の指導の上でどうかというところはあると思います。書き方で何か支障がなければ、三省堂がここに関してはいいと思いました。3つで考えてしまうと三省堂は外れていますが、そのように思いました。

○青木教育長

確認ですが、望月委員は、教育出版と東京書籍と開隆堂出版という順位づけですか。

○望月委員

一応、議論の余地がありますが、東京書籍、教育出版、開隆堂出版です。

○青木教育長

分かりました。

私は、他の教科に比べて、発行者によって差があると思いました。算数や理科は内容が決まっていますが、目次のタイトルも様々ですから、非常に推薦するのは難しいと思いました。教育出版を推薦したいと思っています。

理由を6点ほど挙げます。1点は、聞く、話すの重点度が高く、繰り返し対応できるということ。

次に、文字が太いので英文が見やすく、読むことに集中させられるということ。

次に、日本語が少なく、問題文が簡潔で分かりやすいということ。フォニックスは他にもありますが、系統的に2年間を通して学べる工夫がされていると感じました。

次に、練習問題が多い。

次に、ワードリスト。別冊のものと合本のものがありますが、教育出版は合冊になっていて、巻末にあります。そういうところから、別冊にあるよりも、すぐに調べたりできるのではないかと。絵カードも有効なのではないかということで、教育出版を推薦したいと思っています。

大分割れたのですが、1位、2位、それから順位づけがないということも含めて、教育出版が5人の委員の方から推薦をいただいています。丸山委員は教育出版ということでもよろしいですか。そうしますと、東京書籍を3名の委員からご推薦いただいております、開隆堂出版が2名の委員から、三省堂が2名の委員から、啓林館が1名の委員からということです。5名とも意見が一致したところでは、教育出版ということになりますが、いかがでしょうか。何かさらに付け加えのご意見等がございましたら、お願いいたします。

○三町教育長職務代理者

私はポイント制でいって、この3つが残ったということで、その中で、皆さんも推していらっしゃる教育出版が重なっています。啓林館と開隆堂を取下げても構いません。

○青木教育長

それでは、教育出版の推薦意見が多いということですが、何か特にご意見等があれば、ここでお聞きしたいと思います。いかがでしょう。

○望月委員

先ほど教育長のお話でポイントも幾つか挙げていただいて、お話を聞いた限りにおいて、教育出版が全ての児童のことを考えた上で適正ではないかと思いました。私は教育出版で進めていただいても構わないと思います。

○青木委員

私も、教育出版は、本当に子どもたちが取り組みやすく、先生方も絵カードがあって扱いやすい教科書だとは思っておりましたが、書く内容が少ないのではないかと、それが充実しているものを2つ探してみました。教科書の中だけに書くわけではなく、授業の中で補充したり考え

たりしていくこともできると思います。教育出版で扱っている内容は、本当に身近な話題であったり会話だったりして、子どもたちが楽しんで取り組めるものだと思います。三町委員の観点や、皆さんの判断の観点を伺い、教育出版が一番適正ではないかと思いましたが、教育出版を推薦させていただきます。

○青木教育長

皆様、ご意見ありがとうございました。

それでは、たくさんご意見をいただいた中で、教育出版を議案候補として進めていきたいと思いますが、よろしいですか。

－「異議なし」の声あり－

○青木教育長

ありがとうございます。

では、次に道徳に移ります。道徳について、事務局から説明願います。

○岡崎教育指導担当部長

それでは、特別の教科道徳について説明いたします。

道徳科では、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てることを目標としております。

○青木教育長

それでは、道徳の協議に入ります。道徳につきましても、発行者6者から見本本の提出がございました。図書名を申し上げます。東京書籍が「新編 新しい道徳」、教育出版が「小学道徳」、光村図書出版が「道徳」、日本文教出版が「小学道徳 生きる力」、光文書院が「小学道徳 ゆたかな心」、Gakkenが「新版 みんなの道徳」でございます。

それでは皆様、ご意見を伺いたいと思います。どなたかご発言をお願いいたします。

○三町教育長職務代理者

題材そのものは、これまで文部科学省の作っていた「私たちの道徳」からの題材もかなり流用されていて、質的には、どの教科書会社も一定程度のレベルの内容です。題材としてどれも遜色なく、あまり差を感じなかったところです。扱いの違いや、授業の始まる前の全体の扉のところ、あるいは、その中での主発問が何だったのかといった発問数と内容などを中心に、最終的に道徳の時間の振り返りという形での学習の記録、あるいは評価の仕方に差が出てきているので、そこを見ました。また、おまけのものがどうなっているかということもです。それらを見て、私は

東京書籍と光村図書出版に絞り込ませてもらいました。

基本的には同じですが、題材の冒頭の扱いについて、東京書籍のほうは大体左ページなので、中が見えず、何々について考えようといった投げかけがあって、そういうイメージを持ちながら中に入って行く。開けると、タイトルとその横に短い文章が書いてある。そういう構成で、非常にすっきりした形です。導入発問的なものは教育出版にも光村図書出版にもあり、吹き出しで導入的な発問が少し入っているところは何者か見られました。

題材の末の問いかけの部分を見て、東京書籍と光村図書出版が立場として分かれたという感じですが、あえて選びました。東京書籍は、内容に関わっての発問が1つに絞り込まれている。つまり、読み物教材の中で、ある人物がいれば、それについての質問は1個しかない。それが主たる発問として作られている。それに対して、光村図書出版は2つぐらいあって、その中で中心発問に印をつけている。そういうところの工夫がある。あえて1個に絞り込むのか、あるいは2個にするのか。2個にした場合には、中心発問もしっかり出している。他のところは中心発問が1つのところが圧倒的に多いのですが、2つある場合にどちらが中心なのか分からないところもある。2つ以上の問いがあるときの中心発問がしっかり書かれているのは光村図書出版でしたので、そこを評価したところでした。東京書籍の場合、1つを中心にして、その後、自分自身はどうだろうと考えさせる。これはどこも同じ構成で、自分がどう生きていくか。そして、さらに発展させていくという構成ですので、大きな差はありませんが、問いかけの部分の扱いを厚くしているのが東京書籍と光村図書出版でした。

学習記録に関しては、東京書籍は6題材、自分の思った題材を書くということ。これはどういう使われ方なのか。少し使わせにくいかと思ったのですが、これからの生活に生かしたいことということで3つあります。きっと学期ごとに書かせるのだと思いますが、学期ごとに書かせるということは、道徳でどんなことを学んだかについて、子どもが書いたものを見ながら、教師は場合によっては通知表に生かすといったことにもなるのではないかと。そういう作りはある程度工夫されている。それに対して、光村図書出版の場合は少し短く、それぞれについて一言感想と3観点について、自分で見つける。その観点の表現がいいと思いました。他の教科書会社にもありましたが、その学習で分かる、分からないというのを評価するのはどうなのかと少し疑問もありましたが、光村図書出版のほうがすっきりした形かと思いました。

もう1つ、東京書籍のおまけの心情円など、これは小学校だけではなくて中学校でも使われていますが、心情ということで学習のはじめのときの自分の立場。やや右、やや左でもいい。そういうものからスタートして学習していく中で、どういうふうに自分が変わったかを見ていくことに使えるものがついているということで、東京書籍のおまけはいいと感じたところでした。そうしたことから、東京書籍と光村図書出版とさせていただきます。

○青木委員

6冊読ませていただいたのですが、道徳という授業、道徳性を養うというのは、本当に教える側も学ぶ側もとても難しいことで、なかなか何を学ぶのか、どう心が動いたのかというのは評価

しづらいというか、言葉で書いて表現できるものではないと感じています。実際、そういう場面に出会ったときに、どう自分が動けるかといったところまでいくと、本当に評価できるのかと思います。1時間の授業の中でどこまでというところも本当に難しいかと思いますが、それぞれの教材から読み取れることというのはありますので、それなりに心が動くことはあると思います。

教材を読み取らせるという部分で、やはりその場面を想像したり理解させたりするということがまず大切ですので、その理解を助けるツールが多いものがよいと思って見たところ、東京書籍では、QRコンテンツの中に朗読音声に加えてスライドや紙芝居などもあり、その教材を学ぶにあたってのワークシートなどもあります。教材の理解を助けるものになると思いますので、そういう意味で、私は1番に東京書籍の教科書を推薦したいと思います。

また、もう1つ、現代的な問題を取り扱っているというところでは、教育出版のSNS上で実際起こっている問題を取り上げて、相談窓口を紹介しているものもいいのではないかと思います。教育出版は、巻末資料に礼儀作法やマナーなども掲載しており、これから生活していく中で必要なことというのも資料としてついているところなどを見て、私は東京書籍と教育出版を推薦させてもらいたいと思います。

○丸山委員

たまたまぱっと見たのが、光村図書出版の「ブラッドレーのせい求書」という話だったのですが、これは教育出版でも東京書籍でも同じような内容として出てきます。東京書籍では、「ブラッドレーのせい求書」を日本風にアレンジして、「お母さんのせいきゅう書」という名前にしています。光村図書出版も同じ「ブラッドレーのせいきゅう書」ですが、教育出版だけが作者の原文をそのまま出しているのです。私は原文で読んだほうがいいと思い、他の教科書も見たところ、編集委員が原文を書き換えているものが結構ありました。それには違和感というか、どうせ読むのだったら原文、全体を作り変えないものを読みたいという思いもあります。やはりまとめる人や、それを作り直した人の作為といったものが、どうしても入ってしまうのではないかと思います。本論と少しずれましたが、もちろん、ここの中でも作者がオリジナルで書いている文章もたくさんあります。そういうものが多いほうがいいと思ったのですが、実際に調べられないぐらい多かったので、今回は置いておくことにしました。

道徳のいろいろな素材としては、私は光村図書出版がいいと思いました。三町委員もおっしゃっていましたが、実際に様々な発問もありますし、考えよう、話し合おう、つなげようという能動的な呼びかけがあって、それをどういうふうにもっていくかは、やはり先生の指導になるのかもしれませんが、ただ文章が提示されているだけではなく、そういう発問がきちんとあるのが、やはり道徳の教科書なのではないかと思いました。

光村図書出版がいいと思った点がもう1つあり、5年生でハンセン病の人を取り扱っています。実は、あまりハンセン病のことを取り扱っている教科書がありません。近隣の東村山市にハンセン病の療養所がありますし、そこには資料館もあります。人権や差別を考えたときに、身近にある施設をぜひ活用し、道徳の授業と合わせて資料館に行く、資料館の人に來てもらって話を聞く

といった取組につなげて行ってほしいと思い、光村図書出版をあえて推します。

東京書籍や教育出版も、いろいろと良い文章も載っていて良いとは思いますが、あえて言うのであれば光村図書出版です。

○望月委員

私は迷いに迷ったのですが、光村図書出版の考えよう、話し合おうというのがすごく分かりやすく、投げかけの仕方もとてもいいと思いました。しかも、かなり文字も太いので、読みやすくなっていて、1年生もきちんと作ってあるというのがいいと思いました。こちらが1つです。

東京書籍も、目次等で他のところとは違うと思ったのですが、幾つかのつながる、広がるという項目の中で、ポイントを作って5つのメリットが書いてあったり、流れとしては東京書籍がよいと思ってはいます。優劣をつけるわけではないのですが、特に他とは少し違うなと思ったのが、教育出版です。こちらでは題材の中に、情報と向き合うとか、いじめのことなどがあります。この中で、命ということに対して出ているのが幾つかあるのです。いじめなどもそうですが、命が大切なのだというところで取り上げていただいているのは、すごく大事ではないかと思っております。そういう意味では、教育出版がいいと思っています。

構成から3者に絞ったのですが、少し絞り切れないのが正直なところですが、しかし、命ということに関して、小学校1年生から学ぶというのは、私はすごく大事なことではないかと思っております。どれか1冊ということであれば、教育出版がいいということになります。

○青木教育長

道徳が一番、順位づけが難しく、複数選んでいただいたように思います。

私は、あえて1者推薦させていただきます。教育出版を推薦したいと思います。

理由は3点ありまして、教材とコラムという形でユニットが6つ設定されていて、いじめ、情報モラル、命、人権問題、環境、伝統文化について、本当に多面的、多角的に考えを広げて深められるようになっていきます。特に、人権問題について取り上げているということが印象に残りました。

2点目としては、その中の、特に情報といじめと向き合う教材が6年間を通して充実しているということが印象的でした。SNSのこととか、本当に小さいうちでもこういうような注意が必要なのだ。6年間を通して情報やいじめと向き合うということが強調されているのかなと感じました。

3点目は、もちろんだこの会社も本当にいい教材を、道徳ですから、すごく心にしみる教材を集めていただいていると思うのですが、特に、私も命ということについて、教育出版の教材、心にしみる良質な教材が多いと思った。

その3点が教育出版を推薦する理由となりました。

あと、もう1つ、東京書籍も心のメータという青と赤で、視覚的には非常に使いやすい、学校のほうでも使われていると伺ったので、それも1つの有効な選択であるかと思いましたが、教育

出版ということで推薦したいと思います。

それでは、ほとんど皆さん、一押しということではなく、選びにくかったということなのですが、東京書籍が3名、教育出版は1番という方2名を合わせて3名です。光村図書出版も3名です。この3冊について、委員からいろいろなご意見があり、原文かどうかというようなことも含めてなかなか自分では読み取れなかった部分もあると思うので、そこをもう一度勉強していただきまして、来週絞れたらいいと思いますが、よろしいでしょうか。

それでは、東京書籍、教育出版、光村図書出版ということで、候補を決めさせていただきました。

大変お疲れさまでした。以上で、本日の協議を終了いたします。

次回、8月17日に、本日の協議結果に基づきまして、種目ごとに候補を1者に絞り、それらを議案の原案としたいと存じます。

終わりに、次回の教育委員会は、令和5年8月17日木曜日、午前10時30分から市役所5階505会議室で開催いたします。

なお、教科用図書に関する議題は、午後2時からとし、中央公民館2階ホールで開催いたします。

参集時刻は午前10時といたします。本当にお疲れさまでございました。

以上で、本日の日程は全て終了いたしました。

これをもちまして、教育委員会8月臨時会を閉会いたします。

午後6時48分 閉会